
雪の中からこんにちは、飼い主さん！

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の中からこんにちは、飼い主さん！

【Nコード】

N9129Z

【作者名】

ものもらい

【あらすじ】

凍土にて、ウルクススの亜種なのか一匹だけ黒い兎がおりまして、大きいし色は違うしベジタリアンのくせに強いしで、同族から嫌われてハブられていました。

しょうがなく兎はただ一匹、日々を寂しく過ごしてきましたのですが

ある日、通りすがりの人間と遊んでみようと思いました。

勿論、当然ですがギルドから危険視され、討伐クエストが出されるわけで……凶悪な兎を退治しにきたハンターさんが、やって来てしまったのです。

ですが色々あってそのハンターさんに懐いてしまった兎、遊んでくれるハンターさんとずっと一緒にいたくて、『凄い人』に頼んで人間になれる山菜を貰い、ハンターさんの前で食べてしまいました。すると巨大な黒兎は一人のほっそりとした女の子になってしまったのです！

……これは懐かれたハンターさんこと『飼い主さん』と元兎少女ののんびりふわふわバケツをブン投げたくなるような、恋のお話。

モンハンを最後まで終えて無い+設定もうる覚えなのでかなりおかしい部分がありますので、ご注意ください。

1・初めまして、元兎のハンターです

雪の中からこんにちは。お元気ですか？

ねえねえ、お元気ですか？ねえねえ。…と私は一生懸命跳ねてみるのですが、『飼い主さん』はまったく反応してくれません。折角温かいテントから抜け出して雪の中に潜り込んで飛び出してみたのに。飼い主さん酷いですっ。

え、『飼い主』って？

…ふふふ、この人は私の飼い主なのです。何故なら私は兎。元兎の現人間ですから。

私は真つ白な雪兎の中で、ただ一匹だけ黒くて 皆によくもきゅもきゅされましたのもきゅもきゅし返したら、何故か皆、私に構ってくれなくなりました。

寂しくて雪の中に埋もれてたり、雪玉を作っては通り過ぎる人間に見せたりしたのです。構って欲しくて猫パンチならぬ兎パンチもしたのです。そしたらやっぱり皆逃げちゃって、一人しょんぼりしてたら飼い主さんが来たのでした。

私は同族と同じ匂いのする飼い主さんに喜んで飛び付きました。ぐ

るぐるしました。兎パンチしてみました。そしたら雪の山に埋もれてしまったので、一生懸命引っ張り出しました。

でも何故だか飼い主さんは起きないし震えているので、くつついて温めてあげました。

その間、蜥蜴さんが興味深そうにこっちを見てたのですが、私と目が合うと何処かに行っちゃって。寂しくてそのままお昼寝することにしたのです。

うとうとしていたら不意に飼い主さんがもぞもぞ動きだしたので、私も目を覚ました訳ですが……何故か飼い主さん、ゴロゴロ転がっていました。

私も真似てゴロゴロしたら飼い主さんに蹴られてしまい……多分その時の私は（．．．）って顔してたと思います。飼い主さんも似たような顔をしてました。

それから飼い主さんはゆっくり手を伸ばして、もしかもしやしてくれたので鼻先を押し付けてみました。ああそれで…髭を、引っ張られました…。

でも、仲良くじゃれ合ってたのに、飼い主さんは何処かに行ってしまったのです。

私は寂しくて寂しくて、ずっとそこで丸まってました。そしたら陽が昇った頃に飼い主さんがまた来てくれて、お肉を寄こしてきましたが私はベジタリアンなので拒否りました。そしたら今度は飼い主さんが（．．．）って顔をして、それを見た私も似たような顔

をしたと思います。

次の日も次の日も来てくれたのですけど、やっぱり帰っちゃう飼い主さんが恋しくて、雪山の凄い人に聞いてみたんです。会いたいよーって。

凄い人は「お前は人を見るともきゅもきゅしちゃうから人里には行っちゃ駄目なんだ」って言われました。人間は弱くて、もきゅもきゅすると死んでしまう。そうすると怖い人に滅多刺しにされて、飼い主さんに悲しい思いをさせるんだよ、とも言われました。

じゃあ私はずっと独りぼっちなの？って聞いたら、凄い人はうーんって悩んだ後、小さな声で教えてくれました。

「一つだけ、方法があるけど、そしたら君はもう戻れないし、自分の身も十分に守れなくなるんだよ。それでもいいかい？」

私は当然頷きました。

何かあっても何とかなるだろ精神で生きてきましたから、あんまり深く考えなかったのです。

凄い人は不思議な山菜を渡すと、飼い主さんの前で食べなさいとだけ言いました。き、き、きせいじじつ？…を作ればイケると言っていました。

それで今度は美味しそうな葉っぱを持って来てくれた飼い主さんが

遠くに見えた瞬間にささつとぺろつと食べて、飼い主さんが寄ってくる頃にはもう、ふるふる震えてました。

飼い主さん…すぐくキョドってました。雪を孕んだ風に一瞬視界が閉ざされた後、すぐく寒かったのを覚えてます。耳が痛かったのも覚えてます。

飼い主さんは何も言わないで私を見てまして、ややあってから私に剥がれた(？)毛皮をすっかり着せて手を引いてくれたのですよ。その後色々あったけど、飼い主さんは飼い主さんになってくれました。そっけないけど心の広い人なのです！

だから今だってそっけなく掘り続けてるけど、あと一分したら私の好物の林檎をくれるって分かってます。

そのまま黙って林檎を齧ってたら、最初に言いつけられた　テントに戻って火の番をしてると頼んでくるのです。私が火の番をしながら寝てる頃には帰って来て、また林檎をくれるのです。偶に毒もあるので、わくわくしちゃいます。

「ほら」

「……」

でも、本当に偶に、意地悪をしてくるのです。

目の前に転がってる肉。機嫌が悪いとこれを投げてきます。そういう日は黙っていなくなっただけ心配かけてやるのです。

私は震えていた猫を一匹掴んで、兎の頃よく昇つた場所に腰掛けます。暇だったので雪玉を作ってみました。…兎の頃と違って、当時の雪玉を作るのはちよつと時間が必要なのです。

そしてやつと出来た雪玉！これを 飼い主さんの出口近くに落として気を引くのですよふふふ。よいしょ、よいしょ、てい。

「ぎ

！！」

「ちよ、」

えっへん。と胸を張る下で、何かの鳴き声と隣から猫の「ちよ、」が聞こえましたが無視です。二個目を作りましょう 投下！

今度は何の声も聞こえません。猫は毛を逆立てて丸まっています。私は緊張している猫を撫でると、遙か下から飼い主さんが私を呼ぶ声が聞こえました。

「 黒おおおお！！降りて来いっお前はなんて狩りをしてるんだー！！」

……………狩り、って。何の事でしょう？

＊

「ご注文は？」

「肉」

「葉っぱ！」

「え……」

「…… サンドイッチで」

あの後、飼い主さんが見事仕留めた……えーっと、何とかを売ったりしたら余裕が出たので、飼い主さんが何か買ってもいいよって言うてくれました。

普段はあまり買ってくれないのです……生活が苦しいのかなと思って猫に聞いたら、飼い主さんは医療費とか将来の事も考えて貯金したりとか、色々考えてお金を使っているだけだと言っていました……その言葉通り、どんなに高くても武器と防具とかには妥協しませんもの。

私は家計簿をつけてる飼い主さんの膝を枕にして火に当たる時間が好きです。偶に大人しくしていると二三回頭を撫でてくれるのですよ。

あ、葉っぱと何かが来ました。美味しそうです。

「……美味しい、です」

「あ？……ああ」

「……あの、美味しい、んです」

「……そうか」

「（．．．．．）」

「察しろ。家ならまだしも店では駄目だ」

さつき、飼い主さんは私に分けてくれたのに。なんで私は駄目なんですか。

ずっと（．．．）な顔をしていたら、飼い主さんは特別に甘いものを頼んでくれました。

……えへへ、とても美味しいのです。

でも急いで食べないといけません。

飼い主さんが言うには、これからこの街では花火が上がるそうなのです。私は急な音や大きな音が苦手なので、そういう音を聞くと固まってしまいます。だから私を遊びに連れてってくれる場所は静かな所が多いのです。

今日は飼い主さんの用事はないので、居られる限りは私に付き会ってくれるそうですから、私が早くべろつと食べちゃうのは全然変じやないですよ。だから飼い主さん、そんな目で私を見ないで下さい。

私は飼い主さんに口を拭く様に言われたのでゴシゴシ拭いていると、会計を済ませた飼い主さんに促されて店を出ました。

あまり人のいない所なのでくれる事は無いのですが、飼い主さんはちゃんと服を掴ませてくれるのです。

「何が欲しい？」

「葉っぱ！」

「さっき食っただろうが」

じゃあ林檎なら良かったんでしょうか……飼い主さんは小物とかを勧めてきますが、食欲の前にはまったく……あ、

「きらきら？」

「あー？……ああ、飾り物屋か」

「……？」

「……ま、お前も女だしな。折角だし買ってやる。何が良い？」

「林檎がいいです」

「……うん、俺が選ぶわ」

駄目出しばかりなのです……。

ただどあれはどうかこれはどうか聞いてくる飼い主さんの駄目出しは嫌いじゃありません。

大きな手が小さな髪飾りを摘み上げるのをじっと見ながら、されるがままになってるのも、嫌じゃありませんよ。

服ですけど、誰かにあげようとしてうだうだしてる姿を見るのも楽しいのです
あれれ、今回は早く決まっちゃいました。

飼い主さんは値切らずにそのまま買い付けると、私の髪にそつと差してくれました。

それは青い硝子の髪飾りで、頭を動かすとしやりしやり音を鳴らします……ちよつと、不快。

でも飼い主さんが小さく「まあまあだな」って言うてくれたので、頑張つて慣れます。頑張つて……うーん。

「…どうした？」

「あ……あり、がとう、ございます」

「いや……」

じゃあ、次行くぞ、と頭をわしゃわしゃしてくれた時に鳴った髪飾りの音は、不快じゃありませんでした。

*

無口だけど面倒見のいいハンターさん×悪戯好きの兔少女

1・初めまして、元兎のハンターです（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

* 兎少女 名前は「夜」^{ヨル} 真っ黒な髪の子。力持ち過ぎてヤバイ。悪意の無い、本当に悪意のない悪戯にトラブルを起こす兎さん。

^{ウルクスス} 兎時代の名残は髪以外に無い。兎耳を期待した人はごめんなさい。雪ん子なので肌は白いしベジタリアンだから細い。

装備はウルクススだった自分の毛皮で出来た装備。装備屋の店主が夜に合わせて作ったので、…オリジナル装備なのかな。ちなみに毛は黒って表記したけどチョコレートを黒くした感じ。

* 飼い主さん 名前は「咲」^{サク} 二人合わせて咲夜さん！…というのは置いて、薄茶（セピアゴールドの安っぽい感じ？の色で）の髪 of 青年で、家計簿をつけたりする家庭的なハンターさん。林檎の兎をよく作ってくれるよ！

夜のことは兎時代に「黒」って呼んで可愛がってた（実は小動物大好き。夜は大きいけど動きが小動物過ぎて可愛かった）その名残。「飼い主さん」呼ばわりは非常にヤバイ、明らかに変な性癖の人と見られかねないので、公の場では「咲」と呼ばせてる。

* 本当は竜にしようかな、って思ったんですがちょうど雪の時期兎！に。

いとう／かなこさんの「と・あ・る・竜・の恋・の・歌」を聞いてたら人外×男で何か書きたかったのが始まりです。

とても壮大で美しい歌ですが、本作は壮大さ皆無でございます…。

2・得意な武器はハンマーなのですよ

お布団の中からおはようございます、飼い主さん。

私は放すものと布団をしっかり握りながら、朝ご飯の香りがする飼い主さんに言いました。

……でも私の必死の抵抗虚しく、飼い主さんは容赦なく私から布団を奪うのです。そして首根っこを掴んで猫達の待つ厨房に連れていかれました。

私としてはまだ丸まっていたのですが、ご飯の匂いを嗅いだらやる気が起きました。飼い主さんの隣に座って、一緒に「いただきます」って言うって、葉っぱが巻かれた分厚いのが数個浮かんでいるスープに手を付けます。

「む……つううう……！」

「おい、俺の隣で吐いたらお前もコレみたいに巻いてスープにすんぞ」

「……う、うそつき……」

「俺が一体なんの嘘をついたんだ」

酷い酷い酷い！葉っぱの中にお肉が入ってるだなんて酷い！

飼い主さんは朝から意地悪だ。残したらきつと怒って無理矢理口に入れさせるし、吐いたら無言で責めるだろうし。でも食べたくないし……。

「　　いいか、これはお前の為なんだ。ただでさえ棒みたいなのにお前…そのままだと血が作れなくなつて倒れんぞ」

「……………」

「これでも肉を少なめにしたんだ。葉っぱの裏に芋虫が付いてると思つて食えば別に抵抗ないだろ」

「　　あ、そっか」

「……………否定しろよ…！」

飼い主さんは頭を抱えて「元は兎だしな…」とか「いや、でも女として芋虫が付いてる葉っぱを食つても平気、つて考えは…」とかぶつぶつ言つてるのを見てたら、猫達がテーブルの下から「一気！一気！」と囃したてます…うーん。

「……………もむっ」

「……………！」

「む……………う、うう……………」

「……………食いながら呻くなよ……………」

「ん……………い、芋虫食べましたっ」

「これは芋虫じゃねーよ！」

「む……………！」

二つの意味で突っ込まれました。

もうお腹いっぱいです…食べたくないです…でも飼い主さん怒ってるし…うつ

「よしっ飲み込んだな!？」

「……………」コクコク

「これで最後の一個だ。これが食えたらその新鮮野菜サラダ食っていいぞ」

「……………あ」

「ああん？」

「（・・・・・）」

あーん、って。さっきみたいにしたいに欲しかったただけなのに…………ぐすん。

*

「…………（・・・・・）」

「おい、そんな顔してんな。採集クエスト行ってくるだけだろ。むしろ下級クエストにお前の敵はいないだろ」

「…………（・・・・・）」

「だからそんな顔……………しょうがないだろっ俺は今日はどうしても付き合えないんだっ船に乗らないといけなくてだなっ」

「…………（・・・・・）」

「お前には向いてないクエストなんだ。ほらっ今日は弓の練習しに行くって約束したんだろ。遅刻は駄目だ、早く行きなさい」

「…………」

「……………」
「……（、；、）」
「あの…あれだ、変な人に付いてったら駄目だぞ…」
「……（、；、）」
「……………」送りぐらいは行つてやるから。待つてろ」

黙つて泣かれるのが苦手な飼い主さん。焦り過ぎて刀じゃなくて包丁を持つてゐるのですが……ちなみに待つてゐる間も泣いてました。だつて飼い主さん、今日は夜遅くに帰つてくるのです…一人ぼっちです…。

「旦那さん、砥石忘れてるにゃー」
「あ、そうか…」
「旦那さん、それはただの石にゃー」
「……………」

飼い主さん……エプロン外すの忘れてます…（、；、）

【集会浴場】

「……………」
「……………」着いた、な」
「……………」

「…そうだな、黒が採集頑張ったら美味しいもの作れるかもしれないな」

「本当ですか!?!」

「………… お前って、食欲が満たされればなんでもいいんだな…」

ほら、クエスト頼んでこい。と飼い主さんに受付まで連れて来られたのですが、にこにこ笑ってる受付嬢さんは最近来られた人間なので、慣れてなくて…結局、飼い主さんが受付を済ませてくれました。

飼い主さんは早く自立しろと言います。でもそういう割には甘かったり面倒を見てくれます。だけど意地悪で…複雑な人間です。

なんでも飼い主さん曰く、人間というのは面倒くさいモノなのだそう、私は子供だから分かっていないだけなのだそうです。それはとても…外見年齢と精神年齢が釣り合っていない私には危ない（何故か知りませんが）事らしいので、私の人間関係には基本的に飼い主さんが間に入ってます。

なので向こうからやって来るお二人も、当然ながら飼い主さんのお友達ですよ。

「夜^{ヨル}ちゃん！お待たせー！」

「…？咲^{サク}、お前なんでこんな早く…？」

「ふふふ、聞いちゃ駄目だよスイーツ！咲ちゃんは心配性で小さい子好きな人なんだからっ」

「チェダー…此処で刺身みたいに捌いてやってもいいんだぞ…？」
「やーん怖い！助けてスウィーツー！ロリコンが襲ってくるー！」
「このッ」

「あー！待った、ごめん、悪かったから、落ち着け咲。こいつは
こういう風にしかスキンシップとれないんだ」

二人の間にスウィーツさんが割って入ると、飼い主さんは怖い顔で
チェダーさんを見た後、飼い主さんの背中に隠れていた私を引っ張
り出しました。

「？」

「いいか黒、絶対にこのアマの言う事する事は真似するなツ弓の使
い方だけ学んで来い！」

「あ
」

言うだけ言つと、飼い主さんは背を向けて何処かに行つてしまいま
す。

そうすると私は急に心許無くなって、慌てて飼い主さんの装備の端
っこを掴みました。

「ま、待って下さい。見送ってくれないのですか…？」

「……俺は送りだけって言つたろ」

「あっ…か、飼い主さん……」

「飼い主さんはやめろつて
」！

「……（´；；、）」

「泣くなよ！？」

「……（´；；、）」

すると後ろから女の子泣かしたー！という声が聞こえ、周辺の人は泣いてる私を見てヒソヒソ囁き合ってます。

飼い主さんはごしごし大きな手で涙を拭うと、強く私を引っ張ってお二人の元に連れて行ってくれました。

飼い主さんがチエダーさんと無言で見つめ合っている間にスウィーツさんが手続きを全て終わらせてくれたので、……ついに飼い主さんとお別れが……；；、）

「いいか、二人に迷惑かけんじゃねーぞ。転んで怪我したら、回復薬飲んですぐに傷口を綺麗な水で洗って大人しくするんだ」

「水が無かったら？」

「回復薬でもかけてろ」

「……飼い…… 咲さんも、お気をつけて」

「ああ、……大丈夫だ、別に一人で行くわけじゃないしな」

「………」

お気をつけてと言っておきながら飼い主さんの装備を離せないでいる私の肩に、飼い主さんの大きな手が乗せられました。

「俺のいない間、留守を頼むぞ」

「………」

「……まあ、そんなに家を開けないけどな。夕方から夜までの間、俺の代わりに頑張れよ」

私は声に出せない代わりに静かに頷いて、そろそろと飼い主さんの

装備から手を離します。

すると飼い主さんは「シヨボくれてんじゃねーぞ!」と背中を一回叩くと、未練がましく何度も振り返りながらクエストに向かう私を、ずっと見送ってくれました。

*

チエダーさんは銀の髪が美しい、上級ハンターさんです。

遠距離の武器しか使えないそうですが、凄い実力の方で飼い主さんも舌打ちしながら認める程の腕前なのです。

装備もとても綺麗な虫さん装備。スウィーツさんとお揃いで、頭の装備も一緒に良いからとカチューシャではなく帽子。紫の色がとてもお似合いなのですよ。

スウィーツさんは濃い茶の髪で、青みがかった銀色の瞳。この前上級ハンターさんになられたそうです。

何だかんだで押しに弱いとか騙されやすいとかお二人（飼い主さんとチエダーさん）から聞いています。それと会う度にお菓子をくれたりするので、私は大好きなのです。

「はい、もっと弦を引つ張ってー…もうちょい、もうちょつと頑張ってー…はい、パーン！」
「…あつ」

お二人は飼い主さんの狩り友で親友（飼い主さんは否定してしましたが）のよしみで、主にハンマーを振り回すぐらいにしか能の無い私に根気良く付き合ってくれます。

チエダーさんは普段は子供のように無邪気な人ですが、今のようにご教授くださる時は飼い主さんと似たような雰囲気になります。

私に食事の仕方を教えてくれた時のような…ですね。

ですが折角チエダーさんが手を添えて下さった私の矢は、何故か途中で落つこちて跳ねて転がります。

「うーん、最後力が抜けちゃったからかな」

「……はい」

「夜ちゃん力持ちだもんねー、下手に力入れちゃうと矢がボキン、だし」

「私に…弓は向いてないんでしょうか…」

「んん、まだ分からないよ？力の加減が分かればいい訳だし…狙いはそんなに悪くなかったと思うんだよねえ」

私が転がった矢を拾い上げてもう一度構えてさっきよりは強めの力

で射ると、今度は木に刺さったものの ポテ、と矢が抜け落ちました。

「……（．．．）」

「うーん、これはこれで才能があるというか 」

そう言って引き抜くと、チエダーさんは自分の弓をぱちりと取り出して矢を引っ張ります。

目は細められていて、形の良い唇はにやりと歪んでいて、渴いたのか舌で湿らせた瞬間 鳥さんのお尻に射ました。

吃驚した鳥さんが産んだ大きな卵。凄い凄いと跳ねる私に「でしょっ?」と笑いかけると、弓を仕舞い込んで卵を拾い上げました。

「じゃ、ボックスの所までの護衛、よろしくね?」

「私…が、頑張ります!」

「よしよし、やる気があるのは良い事だぞー」

まあそう意気込んで、此処は比較的穏やかな子ばかりだから、下手な事しなければいいだけなんですよね…。

一応片手にしっかりと握っている弓をパタンパタン弄りながら、鼻歌交じりに隣を歩くチエダーさんとおしゃべりしてもいいでしょうか…。

「あの、チエダーさん」

「ん?」

「飼い主さんは…今日は何のクエストに行かれるのですか…?」

飼い主さんはたくさんの人の前では咲と呼べと言いますが、チエダーさんとスウィーツさん、村長様の前ではそう呼んでも怒られません。いや、嫌そうな顔はするんですがね。

何でも、飼い主さんが「もしも」の時の為の保険だと、私の正体を信頼できる方にだけ教えていたのです。その「もしも」は何かと聞くと、飼い主さんは答えてくれないのですが。

「あー、確か砂漠だったかな。何か珍しいのが来てるから、船で追って仕留めるんだよ」

「砂漠で舟ですか？」

「そ。…実は私、熱いのが苦手でさーそのモンスター倒した事ないんだよね」

「私も砂漠は嫌いです」

「まったくだよ。クーラー十本飲んでもフラフラだね」

「それはドリンクのせいじゃ？」

「スウィーツもそう言ってきたね、『いや、君のせいだよ』って耳元で囁いたら顔真っ赤にして石に躓いてやんのー！もつと弄ってやろうと思ったらボスが来ちゃったんだけどさ、スウィーツは使い物にならないし、結局私が仕留めたわけ」

「チエダーさんはいじめっ子？」

「愛のあるいじめっ子だよ！」

夜ちゃんも咲ちゃんにやってみなよ、きっと反応に困って何やらかすか見物だから！　と大変イイ笑顔で勧められたので、いつかやってみたいと思います。「面白そうです」と私が笑うと、チエダ

「さんは懐かしむような顔で私をまじまじと見ました。」

「どうしました？」

「んん、いやね、故郷の妹に似てるなあと思って」

「妹さんも髪が黒いのですか？」

「私と同じだよ。そうじゃなくなてな うん、子供みたいに笑う所が似てるんだろっね」

「子供……」

「そ。見ててこっちがふわふわしてくる感じ。……いいなー、こんな子と寝食共にしてたら幸せだわー、癒されるわー。……あのロリコンが羨ましい……」

「ずっと思ってたのですが……その『ロリコン』って何ですか？」

「ロリコンはねー、小さい女の子が大好きな変態の事だよ。夜ちゃんは見は18ぐらいに見えても、中はまだまだ小さな子だからね、あの変態はそのギャップに ひゃっ」

がしゃん、とチェダーさんが両腕に抱いていた卵を落としそうになつて必死に抱き直し、私が急いで弓を構えた先には、襲ってきた青い熊さんを追い払っていたスウィーツさんが濡れた手でチェダーさんにデコピンしていました。

どうやら言葉を遮ろうと後ろから近寄つて首筋に冷えた手を当てたようです。

「お前な、夜に変な事を教えてんじゃねーよ」

「教えてないですうー、聞かれたから答えたんですうー」

「お前が聞くように仕向けたんだろっがっ」

夜も今のは忘れとけよ、と肩に蜂蜜がまだ少しこびり付いているスウィーツさんに頷こうとしたら、チエダーさんが「スwwウィーwwツの、肩ww蜂蜜wwww」と笑った事に怒ってしまっただけでそれどころでは無くなりました。

「何？蜂蜜でも投げられちゃったの？上級wwハンターなのにwwww」

「うるせー！ペイントボールが急カーブして当たらなくてな…もたついてたら蜂蜜が」

「ペイントボールは急カーブする機能が付いてるんですか？」

「急カーブする機能wwとかwwスウィーツのペイントボールって最先端ww」

「うっさいよ！」

ひとしきり笑った後、急いで卵を置いて青い熊さんを皆で倒しに行く事にしました。

これも練習だと、私が射るのを二人が見守りつつサポート、って感じでしたが。

何故か戦闘場所はペイントボールが転がっていてあっちこちに中身が飛び散っていて、チエダーさんがお腹を抱えて笑ったのには熊さんも吃驚していました。

育児もこなすハンターさん＋世間知らずな兎ちゃん＋いじめっ子ハンターさん＋出番の少ない格好のつかないハンターさん

2・得意な武器はハンマーなのですよ（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

＊チエダーさん

私がプレイした時のキャラクター名です。「チエダー先輩」って登録してました（笑）可愛い装備しか着せませんよ！

ユクモ村の中では射撃の腕前はピカイチ設定。だって基本的に今回出てきた人しかいないからね！他のハンターさんは旅の途中寄って来た人とか療養してリハビリ目的でとかで、四人以外誰も集会浴場に来ない時があるというマイ設定です。

ガンナーでもバリバリ前線に出てきたり何だりとアクロバティックな射撃をする子ですが、狙いは常に良いという…。いじめっ子ではありませんが弟妹の面倒をみてきたせいか年下の面倒をみるのが好き。自分の面倒もみて欲しいけどね！

何だかんだで良い子だから、咲はからかわれても信頼しちゃうでしょう。

＊スウィーツ君

私がプレイし（ry

装備はチエダーと同じ虫装備。シルクハット被ってますが何か？

双剣ハンターで、好きな武器は狩団子。だってスウィーツだからね。猫達の名前もスウィーツな感じ。チエダーさんはチーズ関係の名前とか付けてる。

ちなみにチエダーさんとの出会いはジンオウガに襲われてユクモ村に向かう道を転がり落ちた先で、精算アイテムの茸とかタケノコを焼いて食べようとしてるチエダーさんに介抱してもらった。

チエダーさんは一応年上で先輩なんだけど、色々酷過ぎて敬えない。でもちよっかいかけてくれるチエダーさんに懷いていて、何かとチエダーさん家に遊びに行ってる。村の人間からはさっさとくっつけよリア充とか思われてる。

*二人共名字を名乗ってて、お互いはお互いの名前を知ってる。

咲君も知ってるけど、スウィーツ君が自分の名前が可愛過ぎて死ぬ位名前を呼ばれるのが嫌なのを知ってるので呼ばない。チエダーさんはどうでもいい時に呼んだりする。最近はチエダーさんに呼ばれても恥ずかしがらなくなってきた、咲君にさっさとくっつけよリア(r y)と思われてる。

チエダーさんは何となく言わないだけ。聞かれたら多分名乗る感じ。ただ性格に合わない綺麗過ぎる名前なので咲君が呼びたくないだけ。周りはその咲君のせいでスウィーツ君と同じく自分の名前嫌いなのかなって思ってた名字呼びしてる。

咲君曰く、チエダーさんの親以上にチエダーさんはネーミングセンスが無い。

3・好物は林檎、林檎の兎なのです

たん、たん、たん、たたん、たたたたたっ

「あ、咲お前、こんな所にいたのかよ」

「…どうした、アレがやつと出てきたのか？」

「いや、…なんだ、お前の姿が見えなかったもんだから、不安です
つと え、ちよつと引くなよ!？」

「だってお前の噂が…」

「違うから、本当に違うから。アレは婚約者が…浮気防止用って…
!」

「おい、泣くなよ」

たん、たん、たん、……

「……………」

「なんだよ」

「…いやね、何ていうか…お前、雰囲気柔らかくなつたよな」

「そうか？」

「さっきの昼飯の時にボケーと林檎を兎ちゃんにした時とかな。

ハンター成りたての頃にリオレウスとばったり遭遇した時の衝
撃が走つたわ」

「あれはいつもの癖だったんだよ…恥ずかしくて死にそうだから暫
く皆の所には行かぬ」

「引き籠んなよ…」

たたた、たん、たと、たん……、

「つーかあの林檎、癖だつて言つてたけどさ、何？お前ン家^{ガキ}に子供でも居んの？」

「ああ…預かつてるつていうか引き取つたつていうか」
「どっちだよ」

「村長が俺に頼んで来て…孤児（？）だったのを俺が拾つたのが始まりだつたんだが」

「へー、女の子？男の子？」
「女」

「おー、いーねー、……手は出すなよ？」

「出さねーよ！」
「分かつてるつて、冗談だつてえ。…で、どんな感じ？美人になりそう？性格とかは？」

「……多分美人…？性格が…何て言うかな、野性児にならないだけ有難いんだろうが……世間知らずだな」

「お、おお？」

「どうしても肉が食いたくないみたいで、棒つきれみたいなんだよ」

「俺ペチャ…スレンダーな子もいけるよ！」

「死ね」

「ごめん…」

たん、たん、たん、

「つーか、さっきから音がするけど、壊れてんじゃないだろ

うな……」

「大丈夫だろ」

「えー…何か聞いてて不安になるから出ようぜー？」

「俺は安心する」

「何で？」

「……あいつが跳ねてる音と、一緒だからな」

たん、たん、たん、

たん、たん、たん、たたた、

*

「一年半、かあ……」

「…？どうかしましたか？」

「いやさ、時間ってこう…早く過ぎていくものだなんて」

「私は…昔は、長いものだと思っていました」

「そうか？」

「はい。特に 待っているというのは…長いのです」

「待つって…咲は人を待たせない方だと思っただけど…」

「ああ、兎だった頃のお話です。……一緒に遊んでくれる誰かを待ち続けた時は　　真っ白な雪の中は、一人で過ごすには寂しすぎます……」

「そう……だな」

「でも、誰かと過ごす雪の中はとても楽しかったです！それを飼い主さんが教えてくれました。今も時々長く感じるけれど、短くも感じるようになりましたよ」

「そうだな」

「きっと、誰かと騒いで、触れあう時間は、楽しいんだ……」

「でも、お爺さんは楽しくなさそうです」

此処は溪流、タケノコが生えている長閑な所。

スウィーツさんが採掘を止めて休んでいる隣で、私は採ったばかりのタケノコをポーチの中に詰め込んでいました。

私が声を潜めて呟いたのにスウィーツさんが呆れた視線を向けた先で、チェダーさんはお爺さんの服の胸元を掴んで怒鳴っていました。

「　　まさか、これだけって訳じゃあ無いでしょうねえ、ああん？」

「いや、流石にこれ以上は……儂だって生活かかってんじゃあっ！」

「知るかああ！！か弱い乙女にセクハラしといてタダで帰れると思うなよッさつさと出すモン出せや！」

「ちよつと尻を鷲掴んだだけだろうが！！」

「不快なんだよ、棺桶に頭突っ込んだような爺に触られて怒らない

女がいるわけねーだろ、ばああかつ！」

「てめ、ハゲは言うなつつてんだろ！……あ、すいません、首締めないで。痛い、痛いよ、お爺ちゃん死んじゃううう……！」

「もういつそ殺してやろうか、モンスターの巢に放り込んでやろうか……！」

ギギギ、と口の端から涎を垂らしながら首をブンブン振るお爺さん。目が笑っていないチエダーさん。

んーと、確か陽がまだ真中に行く前の事でしょうか　お爺さんがチエダーさんが猫を弄繰り回していた所を狙って綺麗な装備の下に潜り込んでやらかしたのです。あと

私の胸にも抱きついてきました　…私としても不快だと思います。…ですが、もうそこまでにしてあげればいいのではないかと思います…。

スウィーツさんの双剣でお爺さんの少ない頭髪を剃っただけで十分大ダメージだと思うのです、そのあとにローキックも入れてましたしね。

ですがチエダーさんはこの通り怒りが収まらないご様子で、普段の穏やかな声も言葉遣いも荒々しいのです。スウィーツさんは見ないふりをして採掘した物をポーチに入れていましたが。

「……おい、チエダーももういい加減にしとけ」

「はあ！？」

「に、兄ちゃん…懐が深い「死んだら隠蔽するのめんどくさいだろう」…えっ」

「確かチエダー、碧玉と逆鱗が無いつて言ってたな……それ、出せよ」

「……えっ？」

「ああ、それいいねえ……夜ちゃん、爺さんの荷物を開けてくれるー？」

「あのっ、飼い主さんが他人の荷物は漁っちゃいけないって……」

「大丈夫大丈夫、爺さんの代わりに出すだけだから、漁るわけじゃないよー？」

「そう……ですか。了解しました」

そういえば私も飼い主さんの代わりに飼い主さんのポーチから道具を出してましたしね、お爺さんの代わりに渡すだけですもの。……ちえ、チエダーさんが怖いから飼い主さんに言われた事に背くわけじゃないですよ！

「んん……つと、これは火打石で、強走薬……これは？」

「あつ！それ……それは駄目ええぶぶふっ！！」

「ちよつと黙っててよー……それは迅竜の骨髓だねえ。夜ちゃん、それこっちに渡してくれるー？爺さんが詫びにくれるらしいから」

「ふがもももっ」

「あの、逆鱗しか……なくて……」

「もー、夜ちゃんったら泣きそうな顔してー……大丈夫、夜ちゃんは悪くないよ？」

「泣き、顔もそそののう……いだだだだだっ！！」

「テメーは黙ってるよ、老いばれがあああ！！」

下手な事をしたらこっちに怒りの火の粉が飛んできそうです……くす

んと鼻を鳴らす私の頭をぽんぽんと撫でて、スウィーツさんはお爺さんの荷物の奥の奥（…が、あつたんですね…）に手を突っ込みました。

「あつたぞ碧玉」

「流つ石スウィーツ！代わりに石ころでも入れてやんなつ」

「あ、ここにも……合わせて三つか
時化^{シゲ}てんな」

「お…お前ら…それでもハンターか！？」

「ああん？ハントしてんだろーが」

「これはタカリじやろうが…！」

「……いいか、夜。やられたらやり返す、またやらかそうなんて考えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く遅しく生きるんだぞ」
「は、い…？」

肩に手を置き、いつもと変わらぬ顔のスウィーツさん。……私の中のスウィーツさんがどんどん変わっていきます…。

それでもやり過ぎじゃないかとチラチラ見ていたら、「夜もセクハラ被害に遭ったんだ、気にする事は無いし許すな」と。きつと咲もそう言うだろうと言われて、やっとこくりと頷きました。

「そらつ、とつとと失せな！」

「このツ……盗人が！極悪犯罪者が…！」

ぺいっと放した…いや、投げたチェダーさんにそう吐き捨てて、お爺さんはスウィーツさんが投げ渡した荷物を抱えて転ぶように逃げ

去りました。

小さくなる背を鼻で笑ったチエダーさんはくりと振り向くと、溜息を吐いてスウィーツさんの隣に腰掛けました。

「まったく。いい歳こいて色惚けとか勘弁して欲しいよ」

「人恋しかつたのでしょかねえ」

「…夜ちゃんはもつと警戒心持たないとね。恋人でもない異性に胸を触られるなんて重罪だから。極刑だから」

「え　でも、チエダーさんはスウィーツさんの胸…」

「あ、あああああれは…！こいつが痴女だから…！！」

「私はスウィーツ限定の痴女だから。…何かスウィーツの顔見ると胸揉みたくなるんだよね…」

「女顔って言いたいのか！？」

怒鳴るスウィーツさんの唇に強走薬の瓶を当てて、「私、君の綺麗な顔が大好きだよ」と悪戯っ子のような笑みを浮かべました。

それにそっぽ向くスウィーツさんにこつそり笑ったチエダーさん。何故か迅竜の骨髓を私に持たせるのに、こてんと首を傾げました。

「夜ちゃんも被害者だからね。私が逆鱗と碧玉三つ、夜ちゃんに骨髓と火打石、一緒にとつちめてくれたスウィーツには強走薬…と私から、蜂蜜」

「あ、じゃあ私は…ペイントボールと投げナイフを」

「ちょwwペイントwwボールww」

「……ちようどペイントボール無かったから、有難いよ…！」

「スイーツが叩いたー!」

「うつせー! 蜂蜜投げられないだけ有難いと思え!」

「あ、蜂さんが…」

「……え? ちよ、蜂蜜の中に蜂が5、6匹沈んでる!?」

「栄養たっぷりで良かったじゃん」

「良くねーよ! お前俺が虫嫌いなもの知ってて

あれ?」
…あ? 何だ、

蜂蜜をしっかり握ったまま、スイーツさんは向こうへと指をさしました。

見れば何とも無いのですが、……一分経った頃でしょうか、何かが光っています。

「ジンオウガかねえ」

「…どうするよ」

「下級ですが…その、私…武器が…」

「上級ハンター二名とはいえ、ジンオウガ向きの武器じゃないし…
てかアオアシラしか出ない筈なんだけど」

「狩り場が不安定だとも言われてないし…。ここは一旦引くか?
狩ることもないだろう」

「村に来なければ別に良いんだけどねえ」

「報告だけしておくのはどうでしょうか?」

「そうしようか。じゃ、今日は帰りましょっと」

そうして、私達三人は仲良く家路についたのです。

報告を終え、付き合ってくれた事の礼を言い　それから、私は家の掃除をしてくれた猫達をもふもふして、飼い主さんが干して行ったのだろう洗濯物を取り込んで畳み終わった後、びくびくしながらじゃが芋のスープを作っていました。

スープなら後で温めるだけですし、他の料理は飼い主さんが来てから猫達を作ってくれるそう。私はコトコトと煮込む鍋を背に、ゆっくりゆっくり林檎を剥いていました。

この一年半で、私はこれだけの家事が出来るようになったのです！

今でも（兎時代の名残か）火が怖いのですが、料理に使う火ぐらいならば手を出せます。これも飼い主さんが狩りに行ってる最中、キヤンプの火の面倒を見続けた成果ですね。

包丁は見よう見まね、猫達の指導に基づいてなのですが　飼い主さんのような林檎の兎にならないのです。さっきの子なんて耳が半分折れてしまいましたし。

「……痛っ」

……しかも、手までざっくり……飼い主さん、早く帰って来ない

かな……。

慌ててすっ飛んできてくれた猫さんに薬を塗ってもらいながら、変な兎を齧っては、ちらちらと扉に目をやります。

今はまだ夕暮れ。飼い主さんが帰って来るまでには時間がたっぷりあります。

だけど……もしかしたら、早く帰って来てくるんじゃないかって、期待してしまう。

そんな私の視線の先、急にノックの音が！

私は包帯を持った猫を背に、急いで扉に駆け寄りました

、

「あの、スウィーツなんだけど」

「チエダーさんもいるよー！」

……思わず、（、；；、）な顔で扉を開けてしまい、お二人に心配されました……。

「ありやりや、夜ちゃんざっくりやったねー？」

「林檎を剥いていたら……情けないです」

「いや、ここまで剥けたんなら大したもんだ……で、これよかったら、お裾分け」

「わっ申し訳ないです!」

「いーのいーの。スイーツは多く作っちゃう子だからね。それに今日は咲ちゃんも遅いし……夕飯食べた?」

「はい、林檎を」

「……林檎を?」

「林檎を」

好物なのです、と言えば、お二人共すごく渋い顔をして見つめ合ってます。本当に仲の良い二人ですよ……。……飼い主さん(、；

；、)

「あの……俺、何か作ろうか?」

「いえいえ、大丈夫です、飼い主さんが作った残りもありますし……」

「ああ、それ?鍋が二つあるの」

「ええ、右のがさっき私が作った……」

「「作った!?!」」

「はい……じゃが芋のミルクスープ……」

「……え、どうしよう。私この子より年上なのに……作れない」

「お前は作ると毒薬しか作れねーもんな」

「目玉焼きは作れるよ!」

ああ、そうかよと冷たく言うスイーツさん。飼い主さんに似てないのに似てるように思えてきました。

そうするとだんだん、なんだか悲しくて、小さく「くすん」と鼻を鳴らしてしまいました。

少し俯いていると、チェダーさんの「じゃじゃじゃじゃーん!」と

いう声と共に綺麗に布に包まれていた箱が開いて、スイーツさんが作ってくれたお裾分けを見せてくれました。

「綺麗なお菓子…！」

「あ、ああ、得意だから…」

「夜ちゃん、この菓子は他のと違って異様に甘いから、食べる時は咲ちゃんにやるんだよ」

「おま…何言って…何で分かんのか…！」

「摘まみ食いたから」

「だから一個足りなかったのか…って無断で食うな！」

「ちゃんと『ごつつあん』って言ったじゃん」

「ごつつあん…？」

「ああ、『御馳走様』ってこと」

「夜は絶対使うなよ、使った日には俺らにとばっちりが来る……ってテーブルに座るなっ行儀の悪い…！」

そう言ってチェダーさんの為にスイーツさんが椅子を引いてあげると、またも扉が 今度は激しく 叩かれました。

「ハンターさんっハンターさん！大変、ジンオウガが …！」

思わず固まった私とスイーツさんに背を向けて、チェダーさんが素早く扉に手をかけました。

＊

「おっしやー！獲ったどー！！」

「うつせえ。叫ぶな」

「えー、だって折角の勝利の余韻が……え、何処行くの？」

「暑いから帰る。用もないし」

「え、ちょ、待って、俺を一人にしないでえええ！！」

「ふう、やっと帰れるな……」

「なあなあ、咲はこっちに泊まんねーの？今から帰るとか疲れんだろ」

「別に。今回はジャックが出張ってきてくれたから負担もそんなに無かったしな」

「……なあなあ、俺と一緒に褐色の美女と……」

「婚約者はどうした」

「ちげーって！此処にな、褐色の美人歌姫が居るんだってー！俺の婚約者はキャワイイけど、偶には違う女の子も見たいのが男だろー？手を出すのは流石にアカンけど、見る分には別に良いじゃん！」

「お前……だから婚約者にホモの噂流されるんだよ……」

「あいつも分かってね　な。俺はシェリー一筋なのにさー？俺は本命以外は見ておくだけにしたい派なの！」

「いや、お前はヘタレなだけだろ」

「ちーがーいーまーすー……って、咲、お前またそっち行くの？」
「……他の奴と会いたくないんだよ」
「もう誰も兎ちゃん事件の事は言わないってえー！一部のハンターからは『意外過ぎて可愛い！』とか言われてんだぞ、お前」
「……？女のハンターなんか乗ってたか？」
「あ、いいや、『そっちの』ハンターさんが……」
「俺絶対この部屋から出ない。…じゃあな。お前も噂が本当にならないように気をつけろよ」
「え、ちょ、ちょ！待って、俺も！俺もご一緒させて下さいいいいい！！」

*

寂しいのはお互い様なハンターさん×ずっと飼い主さんしか考えてない兎ちゃん×セクハラだけは許せない（ここだけピュアな）ハンターさん×セクハラに怒ったけど彼女のキレ方に引いたハンターさん

3・好物は林檎、林檎の兎なのです（後書き）

オマケ

チエダーさんは上級ハンターだけど貧血になりやすくて砂漠にはいけない設定。凍土も同じく苦手だけれどなんとか大丈夫。

料理できないのは猫任せ、後輩が色々持つて来てくれるから。ていうか本人がやる気出して調理しようとする誰かが止める。普段料理しろって言うくせに何故か止める。

スイーツと咲の違いはスイーツはツンとしても照れたり笑ったりするけど、咲はなんか寡黙。溜息と眉間にしわを寄せるのがデフォ。でも内心可愛くてふわふわしたものが好き。

年齢は特に決めてないけど、チエダーさんは咲と同年か一二個下。スイーツはチエダーさんとは三歳下。兎さんはこの中で一番若い。

4・保護者は飼い主さんですよ！

「ジンオウガが、村に迫ってきていると！」

「すでに村人が何人か……」

「ジンオウガ以外にも……」

がたたたたたつ

慌ただしく坂を下るネコタクの上で、私達三人は持ち物の確認などをしていました。

ちなみに私達以外のハンターで上級はチエダーさんとスウィーツさんのお二人ともう一人、療養に來られた人だけ。

下級は私と二人（旅の途中、この村に寄って來たらしいです）いるのですが、二人共ジンオウガは相手に出來ないと断られ、結局三人で討伐クエストを受けました。

スウィーツさんは最後まで反対していたのですが、私が飼い主さんに留守を頼まれているから果たしたいのだと頭を下げたら、渋々了承してくれました。

チエダーさんとはジンオウガ以外の相手の目を引きつけてくれればいいから、絶対にジンオウガに手を出さないことときつく、何度も約束しました。

「畏持ったし…よし、」

「巻き込まれないように頑張ってね、二人共」

「はいっ」

「夜ちゃんは今こうに着いたらずっと耳を澄ませておくんだよ、駄目だと思ったら逃げることに」

「はいっ」

「あまり緊張すんな。過度の緊張も危険だぞ」

「はい…」

「夜ちゃんはずっと咲ちゃんと一緒に狩ってたもんねえ。しょうがないか」

でも、チエダーさんは咲ちゃんより強いから、心配ご無用さ！

と頭を撫でてくれるチエダーさんと、その隣で頬杖ついて口元を緩めるスウィーツさんに「はい」とだけ言って何とか笑ってみせました。

「着いたニャー！」

「あいよつと。…二人共準備運動してから行くー？」

「いらねーよ」

「大丈夫です」

「うっし、じゃあ行くぞー」

弓の練習をしに行く時のような調子で、チエダーさんはライトボウガンを確認した後、私達の先頭をきって歩き出しました。

(……耳が痛いくらい静かです……)

辺りは夜という事を踏まえても異常に静かで、私は自分の足音やお二人の装備と武器がぶつかって鳴る小さな音に怯えてしまいます……。

思わず立ち止りそうになった時 バチリ、という音が遠くから、確かに聞こえました。

「 チエダーさん！向こうのエリアです！」

「おお？早いねえ」

「バチバチいつてます」

「……行くのが嫌になるな……」

私の言葉に駆け出すお二人の背中を慌てて追いかけるながら、私は唇を強く噛みました。

怖がらないで
飼い主さんに頼まれたでしょう。留守を守らなきゃ。

大丈夫、飼い主さんだって、私にハンマーを持たせたら下級クエストにお前の敵はいないって頭を撫でてくれたもの。私はお二人に向かってくるモンスターを叩けばいいだけ。大丈夫、大丈夫……。

「いたよ！スイーツ！」

「よっ……と」

「ちょ　本当に下手くそだね、スイーツ君は」

「うつせ！」

「まあいいけどね、一応当たったみたいだし」

よっこらしよ、とチエダーさんはボウガンを引つ張り出すと、パン、とジンオウガの頭に打ち込みます。

同時にジンオウガが身じろいだ為に掠った程度のダメージにはなっ
てしまいました。が、ジンオウガが私とチエダーさんに襲いかかろう
とする事で時間を稼ぐことが出来ました。

放電の後、ぐ、と身体を後ろに引いたジンオウガの足下に辿り着い
たスイーツさんは、思いつき双剣で大きな足を切りつけます。

当然足の痛みの方に顔を向けるジンオウガでしたが、チエダーさん
に撃たれて慌ててこちらに向くと、足下のスイーツさんを無視し
て飛びかかってきました。

「……っ、と」

「ナイス夜ちゃん！」

それを私のハンマーで殴り付ける事で防ぐと、チエダーさんの撃った弾が爆発。私の氷のハンマーが煌めきながら、今度は仰け反ったジンオウガの頬を殴り付けました。

もう一撃　　そう意気込んだ時、こちらに近づく大猪の音に気が付き、慌ててハンマーで背後から迫る猪を殴りました。

チエダーさんは私を一瞥するも迷ったようで、ジンオウガの電流が放たれるまでその場を動かず、何発か撃っては援護してくれました。

「夜ちゃん避けて！」

私とチエダーさんが両端に逃げて放電をかわすと、私はそのまま猪を殴りつけながら別のエリアに移動します。

「無茶しないで、危険なら逃げるんだよ　　！」

「はいっチエダーさんもお気をつけて…！」

お互い早口にそれだけ叫ぶと、やがて襲いかかるモンスターだけに集中しました。

（　　…どうしよう。まさかドスファンゴなんて…相性悪い…）

アオアシラとジンオウガと相性の良い氷属性。でも猪には相性が悪い。……もうちょっと考えておけばよかったのでしょうか。

……まあでも、お二人がジンオウガを倒すまで持ちこたえればいいだけですから、別にこの子を倒さなくてもいい。……の、ですがこの子とは、兎時代からの因縁があるのです。

私が丸まって寝ていれば突進。私が誰かとじゃれ合っていたら割って入って邪魔をする。食べ物（植物）も荒らされましたし……ああ、何度泣き寝入りしたことでしょう。

この子もさっきのジンオウガも、かなり大きかったです（記録更新間違い無いですね）絶対に負けられません。討てないにしろ、その牙だけでもパツキリポツキリ折ってやるのです！

「やあ　　！」

声と共にハンマーで横腹に一発お見舞い。

僅かに揺れましたが、何だか堪えてなさそう。もう一度横腹に殴りつけ、思いっきり振り下ろしてみても、やっとなんて退いてくれませんでした。

ぶるぶると鼻を鳴らす猪の機嫌がかなり良くないのを察知してハンマーを仕舞うと、急いで距離を開けようと駆け出します　　あつ。

（嘘、アオアシラ　　）

思わず足を止めてしまった私は、迫るドスファンゴの突進をモロに受けてしまいました……。

*

「そいやー！」

「キヤー、スウィーツ君カツコイイー！」

「棒読みで褒められても嬉しくねーんだよ！」

「ぶー」

「ぶーじゃな…おま、薬草噛みながら撃つてんなよ…」

「や、だって生えてたから…なんかもつたいないかなって」

「食う方がもつたいなくね？」

「そう　あ、スウィーツ左に避けて」

「あん？……うわわッ」

「よそ見してんなよー。だから蜂蜜だらけになるし、ペイントボールも急カーブするんだぞー」

「うつせーよ！」

「　　なんかあと少しって感じ。…夜ちゃん大丈夫かな…」

「今回は狩り場が不安定すぎるからな…」
「さっきのドスファンゴとかね…あと少しだし、スイーツ助けに行っただけよ」
「え、でもお前は…」
「大丈夫大丈夫。後は爆殺するだけだし。一応罷ちようだーい」
「……（…大丈夫かな）」
「夜ちゃんの事、よろしくね」

*

此処は、何処なのでしょう…。

最後はがむしゃらに逃げて、殴って、猪の牙をぱつきり折ってやって。そしたら宙に投げ出されて。転がり落ちて……ああ、思い出した。確かエリアアの端の端、背丈の高い草に隠された。大人が一人丸まれる程度のくぼみ（もしくは洞穴？）に入ってしまったのでした。

運良く見つからなかったのでしょうか…。

（あ……装備、所々破れてる…）

私の兎だった頃の毛皮で出来た装備。真っ黒で、ふわふわしてて。飼い主さんの隣にいる時のように、着ていて落ち着く、私の毛皮。

見ればいたる所が土で汚れて、腕とスカートが裂けてて、足はまるまる一本じくじくと痛くて。頬も擦り切れたのか、時折頬を撫でる風が滲みてきます。

（お二人は無事でしょうか…私が相手をしてられなくなったモンスター…のせいで、大変な目に遭ってないでしょうか…）

そう思うととても不安なのに、私は震えるだけで身体が動きません。起きようとしては崩れ落ちてしまうのです。

ああもう　　本当にごめんなさい。あんなに連れてってくれと、役に立つからと強請ったのに、もう痛くて歩けないんです。寂しくて心が折れそうなのです。

だって、こんな目に遭ったの、初めてなんです……。

兎の頃は一人ぼっちで、「夜」になつてからは飼い主さんがいつも近くにいて、庇ってくれてたから。知らなかったんです……。

負けたことなんて、無かったんです……。

（留守、頼まれたのに。お二人に押し付けてしまった……）

飼い主さんは役立たずって言うでしょうか。お二人にはお荷物と思われるでしょうか。…私は、どうやって帰れるのでしょうか……。

ぽつ、ぽつ……ぱたたたた

（雨、降ってきちゃった……）

手の甲に、頬に当たる雨 見てとても寂しくて、寒い。

（…帰りたいです…お家に帰って、火に当たって、飼い主さんの膝に飛び込んで、叱る声も気にせず、そのまま頬ずりをして。今日の事をいっぱい話したい…）

飼い主さんに褒めて欲しくて、じゃが芋のミルクスープ、頑張って作ったんです。

弓はやっぱ駄目だったけど、練習したらもしかしたらって、チエダーさんが。ああ、あと、スウィーツさんがお菓子をくださったんですよ。一緒に食べましょう？

…飼い主さんの方はどうでしたか？砂漠って暑いのでしょうか、辛くはなかったですか？船はどんな ？

（きっと飼い主さんは何から話せばいいのか迷って、眉を寄せるのです。そして一つ一つ、ゆっくり話してくれる。…ああでも、その前にご飯だって言うのかな）

目が熱い。何かが目からとろりと落ちていくのが分かります。

負けなかったら、こんな思いしなくて良かった（この時になって、初めて私は『悔しい』という感情を知りました）のに。勝つてたら、早く家に帰って、飼い主さんを出迎えて、留守を守れた事を褒めてもらえたのに…！

（呆れるかな。駄目な子って思われるかな。穀潰しって言われるかな…）

私、朝のネコタクに乗りながらずっとずっと思ってたのです。今度は嫌な顔しないで、朝作ってくれた肉を葉っぱで包んだスープと一緒に食べたかったとか、「美味しかったです」って言いたかったとか。

もう、そんなの、無理なのでしょうか。また一人つきりなのかな…。

遠くで、大猪特有の足音がする。草を掻き分ける音がする。もう駄目だ。次はきっと見つかる。見つかったら…どうなるのでしょうか。

「……あいたい、よう……」

かいぬし、さん。

「く、ろつ……くろ、…黒　　！何処だ　　！！」
「あ…？」

雨の音、斬り付ける音。悲鳴なのかよく分からない声。飼い主さんの、声……！

続いて聞こえる、どおん、と倒れる音に思わず身体を震わせて、私はもう一度腕に力を入れます。そろそろと身体を支えている腕とは反対の手で、草を掻き分けました。

「そこかつ！？」

草が触れあつてガサガサと鳴るのに気付いて、飼い主さんはビチャンとかパシャパシャと音を鳴らして私の名前をずっと呼んでいて。

「い…し、さん。…かいぬしさん。飼い主さあん！」

飼い主さんの腕が遠くに見えた瞬間、私は駆け寄ろうとして足の痛みによるめいて、ばしゃんと水溜りの中に埋もれてしまいました。

身体を起こして頭を振ると、ガサガサと鳴る草の音は止んでいて、息を飲む音の後に、飼い主さんの大きな腕が身体を抱き起こしてくれました。

「飼い主さん」

「黒ッお前…留守を守ってろって言っただろうが!」

「……ごめんなさい。お役に立てなくて…」

言われるだろうなと分かっているけど、実際言われるととても申し訳なくて。私は思わず零れそうになる涙を堪えようとして震えてしまします。

すると飼い主さんが慌てていつもの通り大きな手で涙をぬぐい取るうとして、……戻してしまいました。

それが寂しくて、どうしてだろうと飼い主さんの腕を見れば血と、葉っぱで薄く切れた傷だらけでした。

「……どうして家にいなかった?」

「……飼い主さんに、留守を頼むって、言われたから……」

「……あ?」

「……留守……」

「……?」

「……(; ; ; ;)」

「……あの、アレか?もしかしてお前にとっての留守って、俺の代わりをすることか?」

「……飼い主さんがそう教えてくれました…」

あれはこの村に来て二月位経った頃でしょうか。
急なクエストに出ていく事になった飼い主さんに、初めて留守番を頼まれたのです。

『飼い主さん』

『あ?』

『留守って、何ですか…?』

『留守は…アレだ、俺がやる事をしたりするんだ。洗濯とか掃除とか…あ、今日はもう終わったからしなくていいぞ。外に出ないで、家でじっと待ってる。…な?』

『待つ……』

『……?』

『(、; ;、)』

『泣くなよ……』

という風な説明を受けたのですが。

留守。『飼い主さんがすること』で、飼い主さんは今回みたいな緊急クエストも参加していたから、参加したのですが……。

「違うのですか?」と首を傾げたら、飼い主さんは急におでこに手を当てて俯いてしまいました。

「……なんでよりもって後半部分を見捨てるんだ」

「？」

「しょうがない、そこら辺は後で教え直そう

…どうした？」

「あのっ、あの…」

私の装備の切れ具合や傷に目を向けていた飼い主さんの手を握って、私は顔を見れなくて、ずっと飼い主さんの手を見つめていました。

「私に、呆れましたか？役立たず…ですよね…」

不安のあまり思わず口から飛び出た言葉。飛び出したら余計に不安が増してもしこの手が振り払われたら。「ああ」と溜息交じりに言われたら、私はどうすればいいのでしょうか……？

「ばあーか」

飼い主さんは俯く私のおでこを、ペチンと弾きました。……地味に痛いのです。

「…俺が何度お前に呆れたと思ってんだ。朝は布団から出ようとしない、ひつついて離れない、肉は食わない、菓子食う時はいつも口にカスが付いてるし、チエダーのあんちくしょうの言う事は鵜呑みにするし、拗ねると何をやらかすか分かったもんじゃないトラブルメーカーだし。……だけど、そんなお前に呆れはしても役立たずと

思った事はねーよ」

「ほ、本当ですか…！」

「ああ」

「駄目な子とか、怠け者とか、穀潰しとか、金食い虫とか…！」

「……………おい。誰からそんな言葉を教えてもらった」

「隣のおば様が言っていたのを聞きました」

「……………」

意味は分からないですけど、とりあえず罵り文句というか、不名誉な言葉なのだと思います。

「……………思つて、ませんか…？」

「…思つてねーよ」

「本当に？」

「本当に」

「私の事、何処かに捨てたりとか…」

「しねーよ」

「じゃ、じゃあ、ずっと傍にいてくれますよね…！？」

「……………」

「…飼い主さん…（´；；；´）」

「…いや、だつてお前、これは何というか、返事のしょうが…」

「（´；；；´）」

「…だああああ…！分かったよ！傍にいるさ、お前が出てくまではな！」

「やったあ！」

その言葉だけで、空はまだ雨が降っているのに何故か晴れているよ

うな気分になれます。

私はそっぽ向いてる飼い主さんに気持ちのままに抱きつくと、胸に頬を擦り寄せて叫びました。

「飼い主さん、大好きです！」

あの雪の中、初めて何日も私に会いに、遊びに来てくれた人。私を拾ってくれた人。

あの日から私は飼い主さんが大好きなのです。わしゃわしゃしてくれる大きな手が大好きなのです。私を受け入れてくれる懐の広さが大好きです。

「……………あ、ああ。そうか」

「飼い主さんはー？」

「あー……………嫌いじゃない、ぞ」

「（．．．．）」

「……………まあ、好き、かな」

わしゃり、と髪を撫でてくれる飼い主さん。何だか嬉しくて、思わず眉を寄せた飼い主さんに笑いかけたら、ちよつとの沈黙の後、コホンと咳を出しました。

「風邪ですか…？」

「ちげーよ。これは……………いや、どうでもいい。ほら、傷の具合

は？」

足とほつぺたが痛いです。あと全身痛いです。…と答えたら、飼い主さんがおぶ　　ろうとして、太刀が邪魔で無理でしたので、抱き抱えて貰いました。

あ、ちなみに私の武器のハンマーは猪の身体に丁度良く挟まっていたらしく、猫達が回収してくれたとの事です。

「あつお二人が　　」

「行ったらチェダーが仕留めてたぞ。スウィーツは…蜂蜜まみれだったが」

「朝からずっとですね…蜂蜜に縁があるんでしょうか…」

「いや、呪われてんだろ、あれは」

あれは近くから見ても化け物だった。思わず太刀を抜く所だったんだ、と遠い目をする飼い主さん。

やつといつもの日常に戻れたような、お家に帰って来たような安心感に包まれた私は、ふと飼い主さんの腕の中で香る、血の香り

の中に汗の香りが混じっていることに気付きました。

しかもよく見れば最初のクエストとなんら変わっていない（今回のクエスト向けじゃない）装備です。……急いで、探しに来てくれたのでしょうか。

「……あのですね、夕飯にじゃが芋のミルクスープを作ったのです」

「ああ、じゃあお前のこの手の怪我はそれか」

「違います。これは林檎を剥くのに失敗して出来ました」

「何で威張ってんだ」

(まるで、魔法のよう)

雨はまだやまず、ぼつぼつと頬に当たっていましたけれど、もう寂しいとは思わなくなりまして。

むしろ、静かに落ちるそれが、とても綺麗な宝石に見えて。

「……やっぱり、飼い主さんじゃないと、綺麗な兎さんは出来ませんでした」

「……そっか」

「帰ったら、作ってくれますか？」

「ああ。……帰ったら、その林檎のせいで起きた嫌な話を教えてやる」

「嫌な話……？」

「癖は恐ろしいって事だ。……いや、本当に癖って怖いな」

「お船の事も聞きたいのです あ、それから飼い主さんにお見せしたい物があるのですよ。スウィーツさんからお菓子を頂きましたから、一緒に食べて、聞きたいです」

飼い主さんがぶっきらぼうな声で「そうか」とだけ言うのが、とても優しく聞こえるだなんて。……飼い主さんはまるで、魔法使いみたいです。

*

超特急で探しに来た保護者ハンター、
兔ちゃんに一瞬惚れかける、
の巻。

4・保護者は飼い主さんですよ！（後書き）

オマケ（備考）

今回のクエストに出てくるモンスターは実は下位レベルじゃなくて上位のモンスター。調査が不十分な状態でのクエストだったせいで夜ちゃんはエライ目に遭いました。

でも馬鹿力なので頑張って一人でドスファンゴの牙をパキツと折れる位には実力があるし、咲ちゃんがいればもうちょっと善戦します。

ちなみに夜ちゃん兎時代の名残の毛皮はかなり上等です。夜ちゃん討伐のクエストは実は上位クエストだったのです。…で、その毛皮を防具にしているので、攻撃力はまだまだ下級ハンターなのでアレですが防御力は上級レベル。……見事に破けちゃったけどね！

*オマケのおまけ。咲ちゃんが迎えに行くまで

急ぎ足でお家に帰る 家に誰もいない 猫と村長から話を聞く 何か色々言われたけど無視してネコタク超特急コース 上級装備で遠慮なく出会うモンスターを血祭り（狩り）に まっくろくろすけでておいでー！…という流れ。

夜ちゃんはまだ精神的に幼くて、家族愛と恋愛の違いが分かってない感じです。咲ちゃんもそれは分かっているんだけど、肉体年齢とのギャップにくらっときちゃう事が偶にあります。

今回は夜ちゃんが出ていくまでとは言ったものの、多分彼はあの手
この手で夜ちゃんの自立を邪魔するだろうなあ とこっそり覗
いていたチエダーさんは思っちゃう訳です。

……ちなみにチエダーさんはキャンプに着くまで見つからないよう
にこっそり覗きながらニヤニヤします。そして色んな所が泥だらけ
草っぱだらけの咲ちゃんを帰り道にからかう予定です。

5・甘えん坊な性格です

もぞもぞお布団から顔を出してこんにちは、飼い主さん。

もうお昼なのです。起きて欲しいのです。スープを温めたんですよ……猫ちゃんが。
ねえねえ、飼い主さん、飼い主さん。

「ん、……お、おお、お前っ何で俺の布団に潜り込んでるの!？」

「昨日、飼い主さんに一緒に寝たいって言ったら『ふあん?』て答えてくれたので、いいのになって」

「おいっそれは返事じゃな……駄目だ、眠い……」

「ご飯ですよー!」

「抱きつくなっ」

そう言って私をベッドから落とそうとして、昨日の打ち身と足の傷（お薬のおかげで打ち身はだいぶ良いですよ）の事を思い出してくれたのかすぐにやめると、渋々上半身を起こします。

顔を覆うように両の手を当てると、「眠い……」とだけ呟きました。

「飼い主さん、ご飯食べたらゴロゴロしてたくさん喋りましょうよ。今日は猫達が家事をしてくれるそうなのですよー」

「あー？…ああ、そういえば昨日そう約束したな…」

「じゃが芋のミルクスープ、食べて下さいよー」

「ああ、それも約束したな…」

「林檎の兎…」

「約束、したな…ふあ…」

あと十五分待つてろ。と枕に顔を埋めようとする飼い主さんに貼り付いて、私は布団の中で足を（無事な方をですが）パタパタしました。

「十五分って、どれくらいですかー？」

「…六十を、十五回」

「六十？」

「……十を六回。それを十五回繰り返せ」

「えっと、十を六…うー、やだやだ、飼い主さん起きて下さいな。

兎は寂しいのが嫌なのです。昨日はとても寂しかったんですから、構って下さいな」

「俺は昨日疲れて帰って…あれ、何か肩に柔らかい？」

「む？」

眠たげな顔で肩を見遣る飼い主さん。その肩の上には私が乗っています。

「く、」

「く？」

「黒おおお！！お前ッなんて破廉恥な格好してんだああ！！」

何故か怒られた格好ですが 飼い主さんの物なのでぶかぶかな
白い木綿のシャツ一枚を着ているだけです。（普段は駄目って言わ
れています）

でも昨日、あちこち怪我だらけだからって渋々了承して……あ、さ
つき布団の中でもごもご動いてたから、ボタンが二つ開いてます。
なんか寒いなーって思ってたのですよ。

「破廉恥ってなんですか？」
「そこから！？そこから教えなくちゃいけないのか！？ていうかお
前、下着はどうした！？」

知らない単語を尋ねたら何故か下着の有無に。だけどその前に胸元
が寒いので飼い主さんにもっとくつつきたいのです ……思わ
ず「ぎゅっ」てしたら叩かれました（．．．）

「……穿いてますよ？」
「下じゃない！上だ上！む、…胸は！？」
「 ちえ、チエダーさんが、夜には付けない方がいいって。き
つと飼い主さんもその方がよろく」
「喜ばねーよ！！…あんのチーズ野郎、今度会ったら 会った、
ら…」

私の返答にガバツと起き上がって（私は跳ね飛ばされる形で起きま

した）の会話だったのですが、飼い主さんは不意に視線を下に、私の左足に置かれた、飼い主さんの手に向けます。
す、と震えた指先が私の太腿を撫でて、「くすぐったいです」とふにやりと笑っていいいますと、飼い主さんはそのまま黙って布団を被って丸くなりました。

「か、飼い主さん…？」

「昨日の今日でこれは無いだろおお！？」

「あの、飼い主さん」

「くっそ、これがわざとだったのなら…！何で無自覚なんだよッい歳した娘が足を出すんじゃないやねーよッ」

「か、飼い主さん…」

「何で洗剤も洗髪剤も住んでる所も一緒なのにお前だけいやに良い匂いすんだよッなんで甘い匂いするんだよッ肉もつと食べよ馬鹿！」
「（；；；）」

*

結局その十五分後？に飼い主さんは部屋から出てました。

私は拗ねて飼い主さんの足下で寝ていたのを横に担がれ、（その前

にきつちりボタンを閉められました）二人で「遅いニャー！」と怒られて肉球に頬を打たれてから席に着いたのです。

「……うん、ちゃんとよく煮込まれてるな」

「じゃ、じゃあ、美味しいですか……？ねえねえ、美味しいですか……？」

「ああ」

「えへへー」

飼い主さんは相変わらず食事しか見ていないけれど、撫でてくれるだけでもその言葉だけでとても嬉しいのです。

私は意を決して葉に包まれた肉をもきゅもきゅ食べて、吃驚した飼い主さんに「美味しいです」と言いました。

「……そっか」

「はい。…私もミルクスープ飲みたいです」

「ああ、ほら」

ずいっと息を吹きかけて冷ましたスープを私の口元に出されたので、温くなったスープをスプーンごと口に入れました。

「……あ」

「？」

「……いや、何でもない。……どうだ？」
「美味しいです」

そうだな、と飼い主さんが白パンを千切って頬張るのをニコニコ見ていたら、飼い主さんにパンを突っ込まれました…。

「……昨日はどうだった」

「チエダーさんに、もう少し練習してみようって。それからスウィーツさんのペイントボールって急カーブの出来る機能付きなんですよ！蜂蜜だらけになってましたし」

「あいつ本当に上級ハンターかよ……」

「お二人と一緒に弓でアオアシラを倒したのです」

「よかったな」

「それで……あ、そうだ！」

いけないいけない。飼い主さんに見せようと思ってたのに、すっかり忘れていました。

私はパタパタと収納ボックスの中を探ると、両腕に抱えて飼い主さんの元に戻りました。

「……迅竜の骨髄：？お前、それをどうした？」

「お爺さんから頂きました」

「行ったのは溪流だろう？」

「御兄弟から譲ってもらったらしいですよ」

「……それをどうしてお前が貰うんだ」

ええつとですね、三人でタケノコを採っていたら、お爺さんがチエ

ダーさんのお尻に触って、私の胸を掴んできて、スウィーツさんの双剣で髪の毛剃られて、チエダーさんがすごく怒ってて、蹴って踏んで胸元を掴んで。

チエダーさんが「詫びに荷物の中身をくれる」って言うから、……だって怖かったのです、私だって駄目じゃないかって言いましたよ

チエダーさんの欲しがった碧玉と逆鱗、私に骨髓と火打石、スウィーツさんに強走薬。……と、チエダーさんから蜂蜜。私からペイントボールと投げナイフをあげたのです。

「……………あのジジイ……！」

てつきりチエダーさんを怒ると思ったたらお爺さんの方に怒りを感じたようです。

「今度会ったらモンスターの巢に放り込んでやる……！」

「あ、それチエダーさんもおっしやってました」

「……………崖から落とすか」

「もついいじゃないですか、過ぎたことですし」

「……………そもそもお前な、胸揉まれたのになんでそんな平気そうな顔してんだ！チエダーの反応が普通だろ？怖いとか気持ち悪いとかあんだろ……！」

「気持ち悪かったですけど……なんか見てて可哀想になって……」

「甘い！今度やられたら腹に蹴りの一発でも入れる！」

「でも……………」

「お前は他人に甘すぎんだよ！」

怒りながらも私の分もお茶を淹れてくれる飼主さん。お揃いの力

ツプを見ながら、私はパンを両の手で弄りました。

「……だって、昔、言われたのです」

「あん？」

「『人間は脆いから、何があっても、もきゅもきゅしちや駄目』って」

「もきゅもきゅ……？」

「飼い主さんと初めて会った時に遊んだ事です」

「おま……アレは『もきゅもきゅ』なんて可愛い擬音を使っているレベルじゃなかったぞ……！？」

飛びついて、ぐるぐるして、兎パンチ。積もって山のように高い雪の中に突っ込んで埋もれてしまった飼い主さん。……あれはやりすぎだったなって、一応後悔してるのですよ……。

「むむ……とにかく、私はやり過ぎてしまうから、気をつけなさいって、手を上げては駄目って教わりました」

「それは　　兎の頃の話だろうが」

「そうですね……でも、私の力って人より強いです……」

「……でも嫌な時は嫌だって言え。言っても聞かない時は暴れてしまえ。我慢はよくないぞ……ほら、茶」

「ありがとうございます」

「お前は若い娘なんだから、余計　　なんだ、そういう……身体を触ろうとしたりとか嫌な事してくる人間にははっきり拒絶しろ。きつちり落とし前つけるんだ。……そういう所はチェダーを見習え」

「はい……ああ、そう言えば、スウィーツさんが言っていました」
「……なんて？」

「『やられたらやり返す、またやらかそうなんて考えないくらいに絞り盗るのがハンターだ。太く逞しく生きるんだぞ』って。それが……これ、なんですが」

食事の席に相応しくないと骨髄を片付けようとする猫達を指すと、飼い主さんは「ハンターじゃねえよ、それ……」と頭を掻きました。

「じゃあ今度は飼い主さんの番です！ねえねえ、砂漠を渡る舟ってどんなのなんですか？大きなモンスターと戦ったんですか？」
「あー…黒は絶対あのクエストを受けない方が良いで。耳がやられる」

「えー？」

*

ご飯を食べて、家事をしてくれる猫さん達にお礼を言った後、私は風通りの良い窓を見ながら、飼い主さんに薬を塗ってもらいました。

「……ていうか、なんでこんなにざっくりしてんだ？お前はどっ

う林檎の剥き方をしたんだ」

「ただ普通に…林檎の兎を作ろうとして失敗したただけなのですが」

「だからその林檎の兎をどう失敗したらこうなるんだよ　　てい

うかお前、この状態でクエスト行ったのか…本当に馬鹿だな」

「（．．．．）」

「服捲れ　　上げ過ぎ！下げろッ」

「（．．．．）」

「まったく…」

もう少し恥じらいを持って、と言いながら薬を塗ってくれる飼い主さん。

私がずっと（．．．．）な顔をしていたら、しばらく黙ってから話題を変えてくれました。

「　　あのドスファンゴの牙を折ったのはお前か？」

「はい。ぼつきりやりました」

「途中、牙が粉々になってたり三分の一の長さでそこらを転がっていたんだが　　お前はどんな殴り方をしたんだ」

「思わず兎の頃の怒りがですね…例えば負けても牙だけは折ってやる
と意気込んでました」

「仲悪いのかよ」

「ええ。だって酷いんですよ！寝てたらぶつかってくるし、誰かと遊んでたら邪魔するし、ご飯を滅茶苦茶にされたり妨害してきたり…」

「むしろドスファンゴ凄くないか、当時のでかくて凶暴なお前に食
ってかかるとか」

「凶暴じゃないです！」

「……人を雪の中に埋めといてそれを言うか」

「……（．．．）」

全部の傷を塗って包帯を巻いたりガーゼを貼り終えたのを再確認すると、飼い主さんはさっさと薬を仕舞おうとするので、きゅ、と握って止めました。

「どうした」

「飼い主さんは、薬を塗らないのですか？」

「俺は草で切ったくらいだからな」

「私が草で切った所は塗ってくれたじゃないですか」

「そりゃ…女なんだ、傷は無い方がいいだろうと思って…」

「この前、チエダーさんが怪我をした時は唾でも付けてるって言うてたじゃないですか」

「あいつはいいんだ」

「よくないです。……さっきのお礼に、私が塗ります。怪我した所出して下さいな」

「…分かったから脱がそうとするな。腹を草で切る訳ないだろ」

「ドスファンゴとか…」

「反撃する前に（上級装備で）狩ったからな」

「砂漠のクエストとか…」

「頬を薄く切ったくらいだ　　ってちょっと待て、その薬じゃないぞ」

「これですね！……はい、ぺたー」

「……」

いつもしがみついたり抱きついたり（偶に）撫でてくれる飼い主さんの腕……案外古傷が多いんですね。

色々苦勞なさつて腕に、私はゆつくりと薬を塗り込みました。

「……………よし、と。次は頬つぺたです」

「もう塞がつて　　そんなに薬はいらん。戻せ」

「これ位…ですか？」

「そ」

「いきますよー。はい、ぺたー」

「……………お前、遊んでるだろ」

「ぺたー」

「……………」

包帯だらけの手で飼い主さんの顔にぺたぺた触れながら、もう片方の手はゆつくり優しく塗っていきます。

そして私と同じく傷口を塞ぐと、飼い主さんが隣に置いていた桶に浸した手拭いで手を拭いてくれました。

そして今度こそお薬を仕舞い、二人の汚れを落とした桶を猫に渡す
飼い主さんの背後で、私は大事に仕舞っていた髪飾りを引っ張り出します。

今日は何処にも行かない（というか行けない）けど、防具を着ない日は付けていたのです。本当は毎日付けていたのですけど…………。

「飼い主さん、飼い主さん」

「あー？」

「髪飾り、付けて欲しいのです」

「それぐらい自分で……あー…貸せ」

別に付けられない事もないのですけど、飼い主さんは断らずに髪飾りを受け取ると、先程の椅子に座るように言います。

飼い主さんが背後でガタガタ音をたてては数歩歩み寄って、また戻ったりを何度か繰り返す間、私は足をぶらぶらして待っていました。

しばらくして飼い主さんは戻ってきた訳ですが、私に何も話しかけずに、まごつきながら髪を梳かします。

最後にしゃりしゃり音がする青い硝子の髪飾りをごつごつした手で添えると、「よし、」と小さな声を出して、私に　小さな櫛を、差し出しました。

「これは……？」

木彫りの花　大きく咲いているのが二つ、小さいのが三つ、薔が一つ彫られている櫛は、お家には無かったものです。

「……ちようど船待ってたら良い露店があつてな。前に髪飾りを買った事だし、櫛でもやればちようどいいかなっていうか…順序逆だったなとか…とにかくっ今回の土産だ」

「……」

「………いらないなら別に……」

黙って彫られた花をなぞっていると、飼い主さんは小さくそう呟きました。

「…………飼い主さん」

「あ、ああ？」

「……ありがとうございます」

「……………ああ、うん」

「とても可愛らしいです。…嬉しい」

チエダーさんならもっと上手に、たくさんの言葉で感謝の言葉を言えるでしょうけど、今の私に、これ以上の言葉は思いつかなくて。

「じゃあお礼に、飼い主さんの髪を毎日梳かしてさしあげます」

「えっ」

*

二人は交際しておりません。これが本来の二人の生活ぶりです。

5・甘えん坊な性格です（後書き）

オマケ

ちなみに咲ちゃんのラッキースケベタイム時の二人の体勢

咲ちゃん がばつと起きて振り向いて説教してたら気付かぬ内に夜ちゃんに少し迫ってた（つまり前のめり）

夜ちゃん 咲が起きる反動で尻餅付いた風になる。後ろに仰け反ったせいで胸元ぎりぎり。足も開いた状態なのでぎりぎり。

咲ちゃんが説教に夢中で前のめりに迫っていた際、太腿とか触られてたけど全然気にしてなかった。そのせいで咲ちゃんも反応遅れた。

という無茶でありえない体制でした。

6・装備は自分の毛皮です

「あー…こりゃあ修理に時間かかるわ」

「どれくらいかかりそうだ？」

「一か月過ぎちゃうかも。今、嫁さんの悪阻^{つわり}が酷くてな……」

「ああ……心配だよな」

「そうそ　　うわああ可愛いと思って付けた尻尾が（、；；、）」

「……（親父の（、；；、）て顔すげー気持ち悪い）」

「…力作だったのに　　……ぐすん。……まあしょうがない、折角だしちよつと大人っぽくする？まだ毛皮余ってんだろ？」

「すっげー余ってる」

「後で持ってこいよ、あと料金はこんなでよろしく」

*

雑誌を読みながらこんにちは、あれから怪我が良くなった元兎です。

実は昨日、私のボロボロの装備を修理しに行ったら一か月の時が必要と言われ、丁度いいから新しい防具を買う事になりました。

その時に貰った「新作・人気の防具ベスト」を帰ってから飼い主さんと読んだのですが……飼い主さんは重そうな防具ばかり選ぶし、私はどうすればいいか分からないので選べず、チェダーさんの所へ相談しに来たのです。

飼い主さんはとても嫌そうな顔をしていましたが、私がチェダーさんに懂れているのを知っているので渋々一緒に付いて来てくれました。

……ちなみに、そのチェダーさんのお家　所々花が飾ってあったりする可愛らしい家に似つかわしくない、「ラッシャイヤセー！」という猫達の大きな挨拶には一年半経っても慣れません。

しかも遊びに行くとき偶に、猫の尋常じゃない悲鳴が聞こえてくるのですが……。あれは何の悲鳴か聞きたいのですが、答えが怖くて聞けません。

そんな不思議なお家の主であるチェダーさんは、猫に持ってきて来させたお茶と茶菓子を私達二人に押しやると頼杖をつきながら口を開きました。

「それでー？私が選んじやって構わないの？」

「……ああ、お互いこういうのに不向きだから」

「よろしく願います」

「いいよいいよー！めっさ可愛いを選んであげるー！」

「……おい、見た目より性能の方を「あ、これ可愛いー！」聞けよっ」

「いーじゃん別にさー。どうせ咲ちゃんがずっと傍にいるんだから、可愛さ重視で良いじゃん」

「この前みたいに別のクエストに行ってる事だつてあんだろ」

「いや、そうじゃなくてさ、どうせ嫁に貰うん…痛い！」

もともとカリカリしていた飼い主さん、チエダーさんのからかう声に耐えられずにデコピンを……ああでも、デコピンで済ませるだけ（いつもは首絞めてますからね）良いのでしょうか。

「……あの、お二人共、これはどうですか？」

「あん？…カボチャ装備は駄目だ。馬鹿みたいだろ」

「馬鹿じゃないです、可愛いのですっ」

「魔女っ子夜ちゃん萌えるわー」

「俺はそんな奴の隣を歩きたくねーんだよ」

「（・・・）」

慎みのあるのにしろ、と言ってお茶を啣る飼い主さんは「月刊狩人暮らし」を読み始めました。

もう知らんとばかりの態度で読まれているページには「子豚拾ったww」というタイトルが書かれています。

「じゃあファルメルはー？大きな羽が可愛いんだよ」

「へー！あれですよ、青緑の綺麗な

」

「あれ邪魔だから。却下」

「……じゃあ頑張ってナルガにしてみるー？セクシーだけどね、」

「却下。合わん」

「……私とお揃いのブナハにしてみる？それで一緒に狩りに行くの」

「チェダーさんとお揃いですか！？嬉しいです…私、チェダーさんと姉妹みたいにお揃いの装備を着けるのが夢でして」

「却下。見てて苛々する」

「もしよろしければ」と続けようとした私の言葉を遮って、飼い主さんはとてもとても低いお声で淡々と短く言うつ、ぱらりとページを捲ります。

次のページは「娘がデキ婚する件……」と見出しがついていました。

「あーもー！！却下却下って 私に任せたんなら黙って雑誌読み耽ってなさいよ！」

「金払うのもこいつとほとんど一緒に狩りに出かけるのも俺だ、任せはするが少しは俺の意見を入れて選べよ。…一緒に狩りに行く俺にな」

「何？何で二回言ったの？そんなに姉妹みたいになりたいって夜ちゃんが言ったのが嫌だったの？……大丈夫、夜ちゃんの事は取らないから。あれだよ、咲ちゃんと一緒だと新婚さんに見えるんだから小さい事言わないの。黙ってデキ婚の話でも読んでなさい」

茶菓子を口に入れるチェダーさんの発言の後、飼い主さんが急に咳込んで手に持っていたお茶がテーブルと雑誌に少しだけかかりまし

た。

（ 飼い主さん、顔真っ赤です……咳のせいで苦しいんでしょうか… ）

あと「新婚」と「デキ婚」って何なのでしょう？

疑問に思ったのですが飼い主さんの咳が治まらないので聞くのをやめて、飼い主さんの背中をさすりながら零れたお茶を布巾で拭きとりました。

その後も似たような事の繰り返しだったのですが、チエダーさん提案のスカラ ならまあ良いかもという話になり……ちょうどチエダーさんがお持ちだということで、試しに來させてもらいました。

「可愛いわー！ほんとーに可愛いわー！」

「そ、そうですか？」

「照れてる所も可愛いわー！咲ちゃんの所じゃなくてお姉ちゃんと一緒に住んで欲しいくらいだわー！」

「えへへ」

「今度お揃いで狩りに行こうね！」

むぎゅー、と抱きしめてくれるチエダーさんに頷いて飼い主さんの方を見ると、じろじろと上から下まで睨まれました…。

ですが何も言わずに本を閉じると、チエダーさんに「次の連続狩猟、お前ら二人来れるか」とだけ言いました。

「私は空いてるけど、スイーツは知らない」

「いつも一緒なのにですか……？」

「んー、私が誘う時はいつでも『空いてるからいいよ』って言うんだよねー。結構気まぐれに誘ってるんだけど」

「……………さっさとくつつけよりア充」

「何か言ったー？」

「いや」

ぼそつと呟く飼い主さんに二人で首を傾げると、飼い主さんは咳払いして続けました。

「……こいつにはまだ連続狩猟は難しい上に怪我が治ったばかりだからな。あまり無茶をするのも良くないだろうから、四人でさっさと倒したいんだが」

「咲ちゃんって本当に過保護だね。チエダーさんたまに苦笑いしちゃいそう」

「うつせーな。……とにかく来れるのか来ないのかどっちだ」

「熱い所じゃなきゃいいよー」

「……じゃあ溪流か孤島か 孤島にするか」

「どうしてですか？」

「三匹相手にするか二匹相手にするかなら後者だろ」

お前はまだ一対一の状況で狩りをしたほうがいいからな。と言って私のずれた帽子をぼんぼん叩くと、「着替えて来い」とチエダーさ

んからぱりつと剥がされて奥の部屋に背を押されました。

*

「す、すすす、すい、すいまっ…せん！クエ、くええ、くえ……」

「なんで鳥の鳴き真似をしてるんだお前は」

「ふふふ、夜ちゃんお久しぶりですね。今日は何のクエストで？」

「れん、ぞく。しゅ…りょうです」

「はいはい。連続狩猟の？」

「あの…あの……咲さあん！（、；；、、）」

「……これで」

「ふふ、了解しました。…お二人ですか？」

「いや、四人で」

「……え、あの、下位クエストですよ…？」

「速攻で終わらせたくて」

「……………（、；；、、）」

「夜、背中に引つつくのも泣くのも止めてさっさとお前のサインを入れろ」

「夜ちゃん大丈夫ですよー、怖くないですよー」

恐る恐る飼い主さんから離れてそろそろつとサインを入れてる元兎です。おはようございます。

今日はスカラ 装備を手に入れる為、連続狩猟のクエストを頼もうとしたのですが……受付のお姉さん、とても優しい方なんです、人慣れしていない私には怖く思えてしょうがないのです。ごめんなさい……。

「……しっかし……この程度のクエストでその装備とか……虐めじゃないですか」

「常に全力なんで」

「それにしても四人はちよつと……」

スタンプを弄りながら渋る受付のお姉さんと、変わらずに「常に全力なんで」を繰り返す飼い主さん。
その背後にぴったりくつついた私が飼い主さんの腰の装備を弄っていると、小さな声でお姉さんに呟きました。

「……最近のモンスターが異常なのはアンタも聞いてるだろう？」

「え、ええ……異様に凶暴だとか大きいとか あ、もしかしてその調査？」

「不安定な狩り場にこの馬鹿（前科持ち）を連れていけないし」

「………過保護ですよ、咲さん……」

ああもういいですよ。はいはい受理しました、とぺたんとスタンプを押すとお姉さんはちよつと顔を出していた私に「気をつけるんだよね？」と微笑みかけると、クエスト注文票を手にも奥に下がっ

てしまいました。

「おはようございます、スウィーツさん、チエダーさん」
「本当に来たな」

出口前でお二人を待つて十分後、お揃いの装備でこちらに向かってくる（いいなあ…）チエダーさんとスウィーツさんが来られました。

「何だよ咲、『本当に来たな』って」
「……いや」

さっさと行くぞ、と頭装備を被りながらネコタクに乗る飼い主さんに首を傾げるスウィーツさんでしたが、特に追求する気はないのかチエダーさんの隣に乗り込みました。

私は飼い主さんの隣で　　はなく、後ろです。だって今の飼い主さんは、飼い主さんは……！

「おい黒、背中に引つつくなって言うてんだろ」
「…ひっ！」
「ナルガ君、大好きな兎ちゃんに怖がられてるけどー？」
「うっせーなッ」

「怖いもんな、分かる分かる」

「黙れエセ貴族」

「エセ貴族って言われた!？」

「虫野郎よりはいいんじゃないの」

どうとも思っていない声のチェダーさんの後ろに隠れようとしたら、
飼い主さんに無理矢理引つ張られ、飼い主さんの うわああ
あああん怖いいいい!!

「……………怖いか、黒」

「はいっだからこつち向かないで下さい! ナルガには昔、猫パンチ
を連打されて追いやられた事があるのです! ト라우マなのです!」

「……じゃあ、ナルガ装備、要らないな?」

「……………あ、見ない分には耐えられ……覗きこまないで下さいい
!」

「要らないな?」

「はいいいい!」

しつこく顔を上げさせようとしてくる飼い主さんにそう叫ぶと、私
は今度こそチェダーさんに抱きつきました。良い匂いのするチェダ
ーさんにしがみついて、飼い主さんの怖い匂いを忘れようと堅く目
を瞑ったら、チェダーさんが優しく撫でてくれました(´；；
、)

その隣でチラチラと此方を見ていた(そんな視線がしました)スウ
イツさんが私達二人に小さな焼き菓子をくれました……あれ、ク
エストに関係の無いもの持って来ちゃいけないって、飼い主さんが

……。

「…お前、ただの菓子からチーズ菓子になったな」

「えっ」

「後で覚えておけよ」

「何で!？」

飼い主さんとスイーツさん、少し似てるお二人なのに
ちよ
っと、仲悪いですね……。

*

新装備候補の中で、一番着て欲しくないものがナルガ装備だった飼
い主さん。

6・装備は自分の毛皮です（後書き）

オマケ（チエダー先輩による後輩の誘い方）

「御主人、明日はどうするのニヤ？」

「明日は洗濯を一気にやっちゃって、庭弄りするか。家の掃除は任せた」

「勿論だニヤー！……にや？」

「　　　　　おい、スウィーツー」

「あー？」

「明日さ、皆で狩」

「行く」

「御主人！？」

「そ。クエストはこれだって。じゃ、」

「あ、……待て」

「そうですよ待って下さい！御主人ツ洗濯とかどうす」

「なにー？」

「これから暇か？暇だったら夕飯食べていけないか？」

「御主人！御主人、あたしの話聞いてく」

「いーのー？…じゃ、お言葉に甘えて　　」

「クソアマがあああ！！あたしと旦那の仲を裂こうとすんじゃないよおおー！！」

「ちよ、この猫蹴ってくるんだけど」

「…シヨコラ、クビにされなくなかったらどっか行ってくれ」

「ご、御主人！？」

「あと明日、俺の代わりにお前らでやっといてくれな。じゃ
「ちょ……………」
ん！」

……………という、最低な男がいたらしいです。

7・特技は採集、水泳です

「ニャー！車輪の部分が壊れちゃったのニャー！やけに不安定だとは思ってたけど……あーもーボロいのはこれだから駄目ニャー！」

「あんなに揺れたの初めてです　　いっぱい揺れて、楽しかったですね」

「夜は意外にじゃじゃ馬だったんだな。これが楽しいとか……」

「スウィーツさんは楽しくなかったですか？…あの、飼い主さんは……飼い主、さんは……」

「……（咲の背中から、人を何人が殺してきたかのような覇気が……）」

「……………」

「に、にゃー…咲さん、申し訳ないけど、ちょっと待ってて欲しいのニャー」

「……………」

「……………ごめんなさい、にゃ」
「……………」

飼い主さんの背中にくっつきながらこんにちは、元兎の夜です。

あれから飼い主さんは無言で少しばかりナルガっていたのですが、今の（不機嫌さからくる）あまりのナルガっぷり（怒気というか何というか）にネコタクの猫も怯えています……。

「い、今、修理するから……待っててほし……くださいませ、ニャ……」

飼い主さんは待つのが嫌いな方だから、口にはしないけど態度に出るのです。空気が非常に重苦しいのです。

ですがその空気（思えばあの激しい揺れも）を物ともせず、チエダーさんは荷物と腕を枕に器用に寝ています。

肩を貸そうかとチエダーさんに声をかけていたスウィーツさんは何処から引っ張り出したのか、何度も石を投げて（多分ペイントボールの）練習をしていました。

「あ、そうニャー！近くに綺麗な滝があるニャ、見に行ったら如何ですかニャー！？その間に僕が直しておくニャっ」

「……………」

「あ、俺はいいや。チエダー起こすのもアレだし」

「……………」

「……………にゃ」

尻尾の毛が逆立ってしまっている猫が、助けを求めるように私を見るので 思わず、「見たいです…」と飼い主さんの装備を引引っ張って強請りました。

引っ張る手がびくびくしていたのはきつと、飼い主さんにもバレてる事でしょう……一向に振り向かない飼い主さんの代わりに、スウィーツさんは何故か投げた石を急カーブさせながら了承してくれました。

「ああ、じゃあ言つといで。俺がチェダーと荷物、見とくから」
「ご、ごめんなさい……」
「いや、別に良いんだ　　咲、連れてってやれよ」
「……………」
「ぴっ」

振り返った時の飼い主さんの顔（ナルガ頭装備）が恐ろしくて、
変な声が口から弾けるように飛び出てしまいました。
奇声を上げる私に降りるようにジェスチャーした（それもそれで怖
かったです）飼い主さんは無言で太刀を引っ張り出すと、軽やかに
ネコタクから降ります。

「あ、私の　　」
「此処は危険なモンスターが出ないから大丈夫だ。何かあっても咲
がすぐ終わらせるさ……下位クエストだし」
「……………」

ぼそつと呟くスウィーツさんを睨みつけますが、飼い主さんは一言
も発しません　　それってかなり機嫌が最悪ナルガですよ、二人で滝
を見に行くの、よくなかったんじゃない……。

「か、飼い主さん、あの、私、そこまで滝を見」
「行くぞ」
「はい……………」

やけに早足な飼い主さんの背中を見失わないように、私は滝に続く道を下りました……。

何度も背後にあるネコタクを振り返ると、ペコペコ頭を下げる猫さんと、相変わらず寝ているチエダーさん、間違って道祖神様に石を当ててしまったスイーツさんが見えて　　思わず、走って引き返したくなりましたが、途中で飼い主さんに強く手を引かれました。いつもは何かの弾みでスルッと解けてしまいそうな程軽く握りしめるのに、今回は切羽詰まったというか、耐えるようにきつく握りしめるし、雰囲気が悪く、泣いてしまいそうです……。

ちなみにその雰囲気の怖さは……「お呼びかね？」とひょっこり顔を出したモンスターがパツと何処かに消えていく程です。

（　　な、何か……お気に触ること、しましたか……？）

クエストの注文も一人で出来ない子だから苛々させたのでしょうか？ナルガ装備にビクつく情けない子だから、呆れてしまったとか……
……ちよ、飼い主さん早いです、早すぎま　　あつ

不意に、飼い主さんの身体が傾き（この時まで、私は飼い主さんが躓いたのだと思っていました）、慌てて引つ張ろうとした私ですが、当然飼い主さんの身体を支える事は出来ず……数歩、よろめいた所で、草の中。を越えて、

(落ち…てる…！？)

あまりの事に声が出ず、何も考えられなかった私がガクンと宙に留まれたのは、とっさに崖に生えていた木の枝を掴んだ飼い主さんのおかげです。

遠くでパシャンと飼い主さんの頭装備と太刀が落ちる音が耳を打ちましたが、私の全ては飼い主さんの顔に注がれていました…
だって、

「…か、いぬし、さん。顔…真っ白です…」

「………ったんだよ」

「え？」

「何でもない…下手に動くな」

そうは言われても、風のせいでブンブンと私の身体は振り子時計のようになっているのですが…。

「飼い主さん…」

「………大丈夫だ、夜」

軋む木の音に私が青褪め、縋るように飼い主さんの名前を呼びますと、飼い主さんは努めて落ち着いた声で、空元氣な優しい声で私の名前を呼びました。

飼い主さんは私がパニックに陥りそうになったり、ただただ私が泣きじゃくる時は決まってこの声で私の名前を呼ぶのです 「黒」ではなく、「夜」と。

力むせいか白かった飼い主さんの頬に朱が浮かび、どうしようもなく腕が震えても、飼い主さんは精一杯の虚勢を張ってくれていました。

「飼い主さん、私の事、離しても、構わないのです」

「馬鹿ッ何勝手に諦めてるんだ！」

「私なら大丈夫なのですよ。私が手を離せば、飼い主さんはきっと無事に上がれます」

「ふざけんな …ッ」

「ほら、手が…」

「うるさい！！」

木の尖った部分に手を刺してしまったのか、飼い主さんの腕に赤い雫が伝っているのが見えます。

それでも飼い主さんは腕を緩めてくれなくて。木が嫌な音を立てても、熱くて痛い手の温度は変わらずそこにありました。

「飼い主さん、」

「絶対、離す …」

か。と続くのでしょうか、下に落ちたせいで聞こえませんがし

た。

「黒っ!？」

ボキリと折れた木の残った部分に何とかしがみつけた飼い主さんですが、一瞬だけ腕の力が緩んでしまったのです。

私としてはこれでいいわけで　先程まではガクブルしてましたが、腹をくくってしまえば心臓が痛いぐらいで済みます。

（ハンマー…持って来なくて良かった）

持つてても何の得にもなりませんし。双剣の方が役に立ったかも…
…あれ？

（飼い主さん!？）

何である人　　落ちてるんですか!？

あのままなら無事に上がったではないですか!私としてはそのまま上がって迎えに来て欲しかったのですが。

ぽけーっと飼い主さんを見れば、飼い主さんは風圧に負けじと手を伸ばそうとしていました。

これは手を伸ばすべきなのだろうかと思った頃には水面が迫って来た、なんて確認する時にはもう水の中。ちよつと痛い入りを方をしてしまいました、まあしょうがないです。

私は兎の頃を思い出して水中でくると回り、近場の岩に足を着く

と、水泡に埋もれるように沈む飼い主さんの所に跳ねました。

私は軽やかな装備というか生地だったのでこんな簡単に動けましたが、飼い主さんは重い装備な訳で ものすごくもがいています。

（飼い主さん…そんな風に動いたら攣っちゃいますよ…）

沈む身体に手を伸ばし、堅く瞑った目に指を這わせ 飼い主さんはそっと、青い世界で目を開きました。

そして私の指に触れて、ぼこり、と何かを呟きます。

（何を …いえ、そんな事より上がらないと）

飼い主さんの頭を胸にしっかりと抱いて、兎の頃とは勝手が違う浮上の仕方でしたが、何とか無事に生還しました。

滝の激しい音に耳がやられそうなので、ゆっくりゆっくり離れます。

耳も身体も落ち着いた所で、飼い主さんは大丈夫かと思えばゆっくりと頭を左右に あ、水滴を払おうと頭を振、……ろうとして固まりました。

（……………ん？ああ、飼い主さんの頭、抱いたままだ）

そりゃあ水滴払えませんかよね、と離れようとしたら、何故か飼い主さんが自分から離れて沈み始めました。

勿論、吃驚した私が救助しましたけどね。

*

インナー姿でもごもご潜り続け、やっと飼い主さんの太刀を見つけました。

頭の装備はもう見つけたのですが、中々太刀が見つからなくて困っていたのです。

（でも、飼い主さん、可愛いのです）

探しに行くと言った時の飼い主さんの顔、気まずそうな顔だったが、ごめんと謝ってから 恥ずかしそうに、小さな声で「泳げないんだ」、なんて。

飼い主さんに出来ない事なんて無いと思っていたからとても新鮮で、ちょっと安心しました。

「……ぶ、はあ……」

水中から頭を出して、ブンブンと頭を振っていると飼い主さんが遠くから私を呼んでいます。

返事の代わりに飼い主さんの太刀を持ち上げて見せれば、いいから上がって来いと返されました。

見れば飼い主さんの近くに焚き火があって、その前には防具が一式と飼い主さんの頭と上半身の装備が置かれています。

私に目を向けてばかりで火に当たっていない飼い主さんの為にも、私は急いで泳ぎます　　と、水中に美味しそうな魚が。

（飼い主さん、喜ぶかな……？）

太刀を先へ流し、ひょいっと潜って胸に挟んだ剥ぎ取りナイフ（念の為にに入れて泳いだのです）を抜きますと、スピードを上げて近づいてグサリと一突き。

飼い主さん、今はだいぶ顔色も良くなりましたが……念の為に、精をつけて頂かないと。

（あ、この石、綺麗なのです）

ついでに拾った鉱石の欠片を胸に入れて、私は太刀の陰に向かって上昇しました。

やっと太刀に手が届いて、ザバツと顔を出せば岸がもう近くで、……飼い主さんが近くにいました。何故か水の中に胴から下を入れて

此方に歩み寄ってきます。

「黒ッ急に潜るな、心配するだろうが!!」

「ご、ごめんなさい…」

「早く上がれ、風邪引くぞ 太刀寄せ」

「はい……」

やっぱりツンツンしたままの飼い主さん。私の手から太刀を受け取るや装備の近くに放り投げ、私に手を伸ばします。

それに私がそつと手を伸ばせば、今度はあの時と違って強いけど優しく、痛くないように引つ張ってくれて。私が上がりきると、急いで火に当たれと背中を押します。

押して 私の片腕、剥ぎ取りナイフに刺されて死んでいる魚に気付きました。

「……何だ、これ」

「お腹の足しにして貰おうと…あと…」

「ちょ、馬鹿ッなんつーところに手を あん？」

「落ちてたので」

「マカライトか…小さいが上質だな」

「差し上げます」

「お前が採ったんだからお前のだ。…ほら、さっさと火に当たれ」

「……（．．．）」

しょんぼりと火に近づく私の傍で、飼い主さんは魚からナイフを引き抜いて鱗を落とし始めました。

何だかその背中が寒そうだったので、失敗したかなと
ちよつと申し訳ないので、温めて差し上げようと、

「おい、調理中だから近づくな」

「……はい（、・、・）」

近づこうとしたらそう止められました。…私、する事ないので。

しょうがないので丁度いい太さの木を探し、手でいい形に折って水に付けて洗い、軽く火に焙りました。木を探しに行く途中で茸（ちやんと食用ですよ！）とかを見つけたので採集と一緒に洗いました。

真つ赤な実の野苺を綺麗に洗って、同じく綺麗に洗った葉っぱの上に盛ると、茸を木の枝に刺して焙ります。

「おま……何処から拾ってきた？」

「あそこですよ」

「……お前って採集得意だよな」

「兎の頃となんら変わりませんからねえ…」

加工した魚に枝を刺して焼き始めた飼い主さんに丁度いい塩梅の茸を差し出すと、すぐガン見されました。信用されてないのでしょ
うか…（、；、；、）

「食えるのか？」

「兎の頃、たんと食べてましたよ……その度にナルガに虐められましたが」

「何で凍土から孤島に出て来てんだよ」

「食料が無くて（、；；、）」

「切実だな……あ、甘い」

私がいよいよもしかや食べたことに釣られたのか、飼い主さんも恐る恐る口に入れてくれました。

「凍土からここまで来るとか、身体は平気なのか」

「色んな子に虐められました……」

「それは何か想像できるんだが、そうじゃなくて 気温の変化とか、…知らない土地での食料の見分け方とかどうしたんだ」

「ペッコ師匠が教えてくれました…唯一私に優しく接してくれた子です」

「師匠つてお前……」

「……でも、ペッコ師匠はだいぶ昔に亡くなりました……ぐすっ

……」

「……狩られたのか」

「いえ、死因は食中毒です」

「ぶ　っ……!」

「か、飼い主さぁん!？」

思いっきり咽た飼い主さんに慌てると、急に茸を火にくべました。
茸さ　ん!!（、；；、）

「殺す気か!？」

「ち、違いますっ、ペッコ師匠は木の実を食べたのです。茸は山菜

のお爺さんも大丈夫って言うてましたから、安心して下さい!」
「本当だな……?」

私が何度もコクコクと頷くのも疑いの目で見るので、私は黙って食べかけの茸を頬張って飲み込みました。

「ね?」

「遅行性かもしれない……」

「じゃ、じゃあ、茸はいいですからお魚を食べて下さいな。野苺もあります……」

しよぼんとした声で進めると、飼い主さんはしばらく無言でややあつてから、野苺に手を伸ばしてくれました。
匂い、形、色と見てから口に入れた飼い主さんは、凍土から孤島に行くまでの「気温の変化」について尋ねてきました。

「そうですねえ、ちよつと暑いなーとは思いましたよ?」

「それだけか」

「耐えられなかったらさぶーんと水に飛び込めばいいのです。さっきみたいに」

「……もしかしてお前、兎の頃から……?」

「あれぐらいの崖、全然怖くないのです!」

むしろ後ろからド突いてきたナルガさんの方が怖かったです……特に目が。

「泳げる鬼って…っ！かお前、ナルガとやり合ったことあるのか？」
「最初は遊んでくれるのになって……『死ねデブ』って吐き捨てられました（、；；、）」「

「デブ……」

「ケルビと仲良くしてたら目の前でその子を食べるし……ドスファ
ンゴと同じ匂いがしました」

「苛めっ子の？」

「はい」

仲良くしたかったのに一方的に私を追いつ立てるのです…と鼻を嚙
ると、飼い主さんは魚を千切りながら「亜種同士なのにか…」と呟か
れました。

「う？」

「いや、亜種同士なら仲が良かったんだがな」

「……私だって、猫パンチされて尻尾で殴られて崖から落とされな
ければ仲良くしていました」

「よく生きてたな」

「紫色の子に助けられたのですよ え？」

すいっと目の前に突き付けられた、齧られた跡があるお魚（上手に
焼きましたー！）……これはもしか、食えという事なのですか…。

「お魚嫌いです」

「身体に悪いぞ」

「茸食べてるから平気なのです」

「いや、そうじゃなくて。もう少し肉を付けんと 」

不意に飼い主さんの姿と声が掠れて、途切れて、目をパチパチとしたり元に戻りました。

「黒？」

飼い主さんはほんの二秒三秒の私の変化に気付いてしまったらしく、魚を引っ込めて私の隣に腰掛けます。

「顔赤い…のは火に当たってるからだと思ったんだが…おい、気分は？」

「…分からないです？」

「気分が分からないってどういう事だよ

吐き気とかは？」

頭痛いとか、どうなんだ？と顔を覗きこむ飼い主さんの顔は心配げで。じーつと見ていたらやっぱり視界が霞んできて。

飼い主さんの顔がすっかり見えない事が何だか恐ろしくて、私はするすると飼い主さんに近づきました。

少し痛んだ髪、怖く見えるけど、とても優しい目。整っている何もかも。

……少し力サついた、唇。

(割れそう……)

割れたら痛いし、何かで湿らせませんと。
飼い主さんの唇に、

そう思った私は、

*

夜ちゃんのファーストキスが

！…の、巻。

7・特技は採集、水泳です（後書き）

オマケ：

咲ちゃんはカナヅチで車酔いしやすい子です。船は平気なんだけどね！

夜の前では「強い飼い主さん」でいたいの、具合の悪さを出さずに耐えていたら「怖い」とか色々と夜に思われてるという……。夜が泳げる子で助かったけど、男のプライド的にちょっと微妙な咲ちゃんでした。

8・兎ですから、寂しいのは駄目なのです（前書き）

「ほのぼの」の予定だったのに「鬱^{シリウス}」が急遽入ることになりました。

和みに来た方、本当に申し訳ありませんが、これからもご愛読していただければ幸いです。

8・鬼ですから、寂しいのは駄目なのです

「よ」

る、という声が、目の前の唇から出る事もなく。

飼い主さんの唇の端に触れようと、…いや、触れたのかな　そ
んなふにやふにやした感覚で、私はゆっくり目を閉じるのです。

飼い主さんはもう何も言わず、私の肩に乗せていた手を、そつと髪
に指して。やがて頬に触れて……………

パァンッ

という破裂音に私がびくうつと跳ねた瞬間、飼い主さんはハッとし
た顔で私を突き飛ばしました……痛いのです……（・・・・・）

「　　おいおいおい、人に火竜の世話させて、テーマは可愛いお
んにゃのことにゃんにゃんしょうってか？いい御身分だよねえ……咲
ちゃんよお？」

銃口から出る煙を吹き消すと、チエダーさんは座り込む私に手を伸ばしてくれました。

見上げると、その顔はとても……殺気立ってて。私は恐る恐るその手をとって立ち上がろうとしたら　　そのまま後ろにすんと、と。

「咲……薬でも盛ったの？……ド下種が」

「ち、違うー！そいつが勝手に……何かよく分からん茸を食ってたせいだろー！」

「茸　？茸……え、これ食べさせたの？」

まだ火に焙っていない茸を拾い上げて上下左右に覗きこむと、チエダーさんはすぐにポーチを探り始めました。

「……これ、胡散臭い惚れ薬とかの闇商品に主に使われる茸だけど」「闇商品……？」

「知らなくても不思議じゃあないんだけどさ……とりあえず、この茸を食べると夢見気分になるっていうか、思考が鈍るっていうか」

「黒ッこれバリバリ毒茸だろうが！？」

「うー？」

「よしよし、夜ちゃん良い子だからこの解毒薬飲んでねー？」

ちよつと苦いけど我慢するんだぞ　？と渡された青い薬と、チエダーさんの綺麗な微笑に見惚れて、そのまま黙ってばんやりとお薬を持っていました。

綺麗な銀の髪が葉の合間から零れる光りに優しく照らされて、とても綺麗で。私では出来ない美しさが羨ましくて。複雑で苦しい胸を抱きしめて疑問に思っていると、チエダーさんのいつもののんびりとした声がやっと聞けました。

「いやー良かった良かった。咲ちゃんが何も知らない無垢な子兔を手籠めにするのかと思って、お姉さん焦っちゃった」

「大変不名誉極まりないが……あの時気を殺いでくれたこと、感謝する」

「…………え、それって」
「……………きっと、俺も一口食ったからだと思う。きっとそうだろうから何も言うな」

「ケダモノよー！ 兎さんをはくつとぼりつと食い散らかそうとする
狼よー！」

「うるせええええ！」

…… 叫ぶ飼い主さんとからかうチエダーさんといういつもの光景に
何だかほっこり のはすが、何故か今日は寂しくて。

あの時、髪を梳いた手は優しく、頬に触れた手は熱かった。…確かにそうだったのに、今にも忘れてしまいそうな怖さが、お二人を見れば見るほど胸を突いてきます。

しかも私がオロオロと見ている前で、チエダーさんは飼い主さんの肩に腕を伸ばし、そつと顔を近づけて囁きました。

「しかもさー、女の子に乳首見せるってどういふことよー」

…この露出狂が。夜ちゃんが恥ずかしがって照れちゃったりする初
な反応にニヤニヤしてたんでしょ？それとも『俺の体、美しいだろ
う？』って言いたかったの？キモイんだけど。キモイ越えて死んで
欲しいんだけど」

「んなわけねーだろおがッ上装備付けたままだと擦れて痛かったか
ら…」

「え、乳首が？」

「乳首から離れる痴女が！！」

「私はスウィーツ限定の痴女ですー！」

「痴女って事は認めんのかよ！？」

……。

……飼い主さん、私が抱きつくと怒るのに。

…それにいつも思ってたのですけど。飼い主さんはチエダー
さんと一緒にいると、とても賑やかなのです。…普段は無口なのに。
なんでかな。どうしてかな…？

飼い主さん、飼い主さん…兎の事も構って下さいな。見て下さいな。
……ああもう、寂しい。

（ああそつだ、寂しいのなら　　）

そつと、優しく、一瞬で。

「く……ろ……！？」

飼い主さんの、傷だらけの身体を。

*

「な、ななななななな……ッ!？」

「可愛いー!抱きついたまま寝ちゃったー!」

「いやいやいや、引つ剥がしてくれ!今すぐに!」

「えー…勿体な……ああ、」

「は?」

「今の夜ちゃん下着姿だもんね。柔らかいのとか眼福とかもろもろバーンだよな?」

「ごめん何言ってるのか分からない」

「下、ちゃんと見てご覧よ。谷間」

「死ねえええええ!!」

「はいはい、冗談冗談メンゴって。…でもさ、」

「あん?」

「これは冗談抜きな話だけど、咲って」

「…何」

「……んー、どうしようかなあ……」

「おい、言えよ。なんか気になるだろ」

「えー、だってさ、後で恨まれたくないし」

「お前は何を言おうとしたんだよ……」

「咲ちゃんが一年前からずっと、見ないふりをしてきたこと」

「はあ？」

「だからさー…うーん、人間不信の咲が絆されてることについて、
っていうか」

「……………」

「夜ちゃんは本当に「良い子」だもんねえ。保護者は面倒臭いとか
言っておきながら、何だかんだ言って箱入り娘に育ててるのも分
かるよ。大事にしたらしたただけ懐いてくれる夜ちゃんはさぞ可愛らし
い事でしょうなあ？」

「……………」

「や、そんな顔しないでよ。私は別にちょっと歪んでる君の教育方
針というか縛り方に口を出す気はないさ。内心どうあれ、君は夜ち
やんの自立を促そうとはしてるし」

「……………」

「私が言いたいことはただ一つさ」

「……………何だ」

「……………」
頼りになる親御さんを夜ちゃんの前では気取っておき
ながら、実は裏で紫の上計画を着々とこなすなんて、君は本当にH
E N T A I だな！」

「……………」

「むっつりー！ロリコーン！」

「……………」

「すけべー！…あれ、なんで首傾げてんの…………？」

「……………」

「……………」
「……俺…紫の上計画…してるか？」
「えっ」
「こつちが『えっ』って言いたいんだが…あと俺、そんなに甘やかしてたか…？」
「ちょ、嘘ww深読みしたったww早まったったww」
「はあ？」
「だってさ、咲ちゃんって、」

君の耳元にそっと、爆弾を落としてやれ！

*

「やーい草っぱ兔！お前が食った草wwスタボロにしといたからwwww」
「ちょ、こつち来んなし。人間に見つかって狩られるだろ、どっか行け」
「いえーいww水ww飲んでるwwお前にwwドーンwwww」
「汚ねえんだよ、お前の毛の色。おかしいだろ、凍土^コで真っ黒な毛並みって。迷惑だからお前は洞窟の奥に一生引っ込んで。毒吐き

野郎と仲良くしてろよな。ていうか死ね」

「人間にww襲われてるwwwwお前にwwドーンwwww」

「てめ、此処を何処だと思ってんだ。此処は雪ン子が来る所じゃねーんだよ、畜生が」

「こんな所で寝てるww危機感の無いお前にwwドーンwwww」

「川で泳いでシェイプアップしろよピザデブ」

「お前を苛めてた兎wwwwハンターに突っ込んでってww撃たれて死んでたよwwwwざまあwwww自業自得wwww」

「何で雪ン子のくせに泳ぐの上手いんだよ。マジで死ね。鍋にされて死ね」

「ハンターと遊ぶとかwwキチガイすぎwwwwあいつらwwすつごく危険だからwwお前の事狩る気マンマンだからwwww……行かない方がいいって…」

「……んん……もう、何も……怖くない……」

「……黒、死亡旗を夢の中で立てるな。さっさと起きろ」

「……葉っぱ踏まないで……」

「…………おい」

「ん……はんたーさんは……いいひと……こわいけど」

「…………夜」

「ちよつとー！スूप冷めちゃうから夜ちゃんにときめいてないでさつさと起こす！こそつと名前を呼ぶぐらいならはつきり呼ぶ！十秒以内に起こさないと咲ちゃんのだけ土入れるよ！」

「……地獄耳が」

「あん？……やべ、土が」

「おい！？」

「みっ」

耳元で急に叫ばれた元兎の夜です。こん……こんばんは？でしょうか…。

真つ暗な……キャンプのベッドの上で、私は一人丸まっていたようです。

「あ、夜ちゃん起きたー？」

「は、はい……あの、此処……何で私、寝て……？」

「ありやりや、覚えてない感じ？……咲ちゃんよかったねー！」

「……飼い主さん？」

「………」

からかい声のチエダーさんの言葉の意味が分からなくて、私は傍で膝をついていた飼い主さんを見上げます。

ただ飼い主さんは答えないどころか此方を見てくれなくて。私が不安になってもう一度読んだら、短く「飯だから起きろ」とだけ言っつて、キャンプから出ていきました。

「飼い主さん……？」

「あ … 夜ちゃん、ひとまずご飯にしよう？」

「でも……………」

「…いつまでめそめそしてんだスイーツ野郎。さっさと食うぞ」

「……………食べたくない……………」

「ちょっとー、ご飯時くらいは明るくしてよ … 『二人』とも」

「……………チッ」

(……いつもなら、私がキャンプから出るのを、待っててくれるのに)

向こうと違って静かなキャンプのベッドの上で、私は不思議に思つて首を傾げました。

再度の呼びかけにそろそろと飼い主さんの隣に近づくと、飼い主さんは何も言わずにスープを俯いているスイーツさんに手渡してて、やっぱり私を見てくれないのです。

「はい、夜ちゃんの」

「…ありがとうございます」

「皆いったねー？…じゃ、いただきますー」

「……………」

「…いただきます」

「あらまあ声を揃えちゃって」

「いつもそうなので…ね、飼い主さん？」

「……………ああ」

窺つように飼い主さんに振れば、飼い主さんはスープに目を落として気の乗らない声を …… 本当に、私、何かしたのでしょうか？

「……あの、どうされたんですか？」

「……」

「さっきから……」

「……」

「………え…と、スイーツさん、俯いてて…」

思い切って直球に聞こうとして、飼い主さんから発される重圧に負けて、二番目に気になった事に話を切り替えます。

切り替えたら少しは空気が軽くなったのですが、やっぱり飼い主さんはこちらを見てくれなくて。

苦しい沈黙を破ったのは チェダーさんが雑に火に木を突っ込み、火花が飼い主さんへと散ったせいであげた、飼い主さんの舌打ちなのか声にならない悲鳴なのか分からない声でした。

「スイーツはねー、自分の力不足に嘆いてるの」

「力不足…？」

「そ。火竜を倒した隙にね、ドスジャギイに猫が攫われちゃって。様子見したら猫は見当たらなくてね、明け方になったら討伐しに行こうって事で話が纏まったの」

「はあ……」

「……俺が相手をしている間に、お前はチェダーと東の方を探しておけ。猫を見つけたら笛を吹け」

「あ……」

まだピリピリしたのが残っているけれど、やっと私の方を見て話しかけてくれた飼い主さんにぶわっと涙が零れそうになり きっ

と変な顔をしているだろう私の表情に、飼い主さんが何故か唇を噛みました。

飼い主さんがポンポンと私の頭を叩くのに思わずふにやりと安堵して、笑ってしまつて。

急に温もりが戻ってきたような、味覚が戻ってきたような気がして、私は飼い主さんに「美味しいですね、」と笑いかけました。

「…そうか」

「このスープの火加減、私がしたんだよー！美味しい？スイーツも美味しいー？」

「火の加減見たぐらいで威張るな」

「えー、大変だったんだよ、加減見るの。ねー？」

「はい。難しいです」

「お前と黒は違うだろうが。何年一人で暮らしてんだよ」

「ナ・イ・シ・ヨ」

「うぜえ」

「ひつどーい…あ、スイーツ、口についてるよ」

「ん、ありがとう」

「……黒、残さず食べよ」

「は、はいっ」

その言葉に急いで口に入れたら　　なんと、小さく切られたお肉が……！思わず戻しそうになって、でも思い留まろうとして。…結局咽てしまった私に、チエダーさんが慌ててお茶を入れるのが見えました。

スウィーツさんがのろのろと顔を上げた頃には、飼い主さんはゆつくりと背中を擦ってくれました……飼い主さんの手、とても温かい

のです…。

少しずつ治まった所で、チエダーさんが良い香りのするお茶を渡し
てくれて、小声でお礼を言って少しずつお茶を飲みました。

「まだ解毒薬が上手く効いてないのかもな」

「んー…そうかも あ、スイーツ君つたら盛てくれるの？
ありがとう」

「いや…二人は？」

「じゃあよろしく」

「ん」

「黒、もう半分は食べれるか？」

私がふるふると頭を横に振ると、飼い主さんは珍しくそうかと言っ
て自分の茶碗を受け取ります。…いつもなら「返事なんてどうでも
いいんだけどな」とか言って盛てしてしまうのに。

でも折角飼い主さんの機嫌がちょっとだけ治ったというか、良くな
ったのに下手にせつついてさつきみたいになるのはごめんです。…
黙っておくのが吉、でしょうか……。

(……………あ、)

ふと、飼い主さんの指先が喉元をゆつくり擦っているのが見えまし
た 飼い主さんがこれをする時は、大抵は喉が渴いている時な
のです！

「飼い主さん」

私は名誉挽回と飼い主さんの二の腕に触れて、「お茶は如何ですか？」と湯呑を見せて。

数秒の間に飼い主さんが固まったかと思うと、ドンと後ろに、突き飛ばされてしまいました。

「か……い、ぬし……さん……？」

お茶碗も湯呑も辺りに散らばってしまっただけ、そんなのに目を向ける事もなく私は飼い主さんを見上げました。

私は飼い主さんに突き飛ばされた事なんて……クエスト中に避けさせようとする為だとか、私の不注意や飼い主さんの事故のせいだという位しか無くて。

こんな風に、平時に、意図して突き飛ばされた事なんて無くて。

（き、らわれた………！嫌われた嫌われたっ！！どうしよう！？）

いつも、二の腕に触れてた。ううん、腕にぺったりくっついてた。それでも飼い主さんは怒りもしなかったし止めもしなかった。偶に頭だつて撫でくれた。だから不快な行為じゃないと思っていた

…じゃあ何が、気に食わなかったのでしょうか……？

（の、飲みかけのお茶ですか？でも飼い主さんは特に……ここまで怒

った事なんて、なかったのです……そう、こんな……)

多分、呆然と大きく目を開いた私の両の目から、ぼたりと涙が零れて。

飼い主さんは視界が揺らいでよく見えなかったけれど、突き飛ばしたままの形で動かなくて。どんどん短い間隔で泣き始めた私に、掠れた声で「夜」と呼んで。

チエダーさんもスウィーツさんも固まって私達二人を見ていて、飼い主さんがゆっくり近づいた瞬間、私は弾かれたかのようにそれこそ脱兎の勢いでその場から逃げたのです。

*

ポーカーフェイスが上手いかなくて苛々して突然の接触に記憶がフラッシュバックして混乱した飼い主さん、兎さんを泣かす、の巻。

8 ・ 兎ですから、寂しいのは駄目なのです（後書き）

オマケ：スウィーツ君が病んでた理由

・ 咲ちゃんと夜がイチャイチャしてた頃、何故か討伐対象の火竜が登場。この時、スウィーツ君は道祖神様に石を投げたからだと言きそうになりました。

・ 当然起きたチェダーさんと一緒に上位ハンター二名で下位モンスターを狩ります。この時猫は岩の陰で震えていました。

・ チェダーさんに良い所を見せたいスウィーツ君。頑張つて斬り込んで斬り込んで斬り込みます。

・ 尻尾も切り落とし、肩とか頭とか派手に斬りかかっていたら、チェダーさんが撃った弾が火竜の（すでに二三発撃たれた）眉間にゴツツン。弾間違えて爆発。

頭が吹っ飛ぶシーンに、モロに見てしまった二人と一匹は固まりました。

・ とりあえず最低な勝ち方をした二人ですが、スウィーツ君はこのトラウマになりそうな光景に道祖神様に石をn（ry

・ そしたら今度は何故かドスジャギイが仲間と一緒にやって来ました。

今度こそ良い所を見せようとしたら火竜の脳味噌踏んづけて派手に転ぶという……ジャギイに連れ去られる猫を見てるだけの自分、散らばる火竜の脳味噌、颯爽と格好良く自分を助けるチェダー、道祖

神様にい s (r y) の諸々の理由で自信喪失意気消沈、とにかくズ
ブズブに沈んでしまったスウィーツ君。

信心深いスウィーツ君はメンタルが非常に弱いのです。

9 ・新しい環境にはなかなか慣れません（前書き）

兔ちゃんが苛められるお話です。ご注意ください。

9・新しい環境にはなかなか慣れません

「う、うう、う きゃんっ」

ぐしゃぐしゃの顔で適当に走っていたら躓いて派手に転んでしまいました…。

そしたら膝が痛くて、手が痛くて、頭が痛くて、心臓が痛くて
とにかく全身が痛いことにやっと気付いたのです。

今は月が隠れていて、星明りでは傷の程度も分からず…私は近くの木に身体を寄せて、夜の暗闇に怯えて震えるぐらいしか出来ませんでした。

（…飼い主さんの為につて、あんなに、なのに、私は空回りしてばかり…っ…）

精をつけてもらおうと魚を獲ったら、それを捌く飼い主さんはとても寒そうで。喜んでくれるかなと思って渡した鉱石は、受け取ってもらえなくて。……喉が渴いたのだろっと思ってお茶を渡したら、気分を悪くさせてしまった。

……こんなつもりじゃ、無かったのに。

（『ありがとう』って、…ううん。ただ撫でくれるだけでも良か

った。感謝されたかった…必要とされたかった…)

飼い主さんが慌てて迎えに来てもらってからずっと、…ずっと。

あの雨の中、たった一人きりの生活に戻るんじゃないかって怯えた時から　何でもいい、どんな事でもいいから、飼い主さんの役に立ちたかったの。

こんな私の面倒を見てくれる飼い主さんに、報いたかっただけなの……だから、嫌わないで。突き離さないで。

もう隣がいいなんて思わないから、煩わしいのだったら隅でひっそりとしているから。せめて飼い主さんの世界の端で、生きさせて欲しい。

(……ごめんなさい、したら、許してくれますかね……?)

多分、でも、会いに行き辛い。ひとまず飼い主さんの所に行かないで、チエダーさんの所に……いえ、それは迷惑ですよ…。

チエダーさんとスウィーツさんが私に良くしてくれるのは、ただ飼い主さんが頼んだからですもの。逃げ出した先で庇ってくれる間柄では無いでしょう。

(会いたいの会いたくない、なんて…面倒臭い)

兎の頃は、そんな複雑な感情、知らなかった。

会いたいから会いに行く。ただそれだけの思考回路。

なの

に。飼い主さんの言う通り、「人間」は面倒臭い。

そんなぐちゃぐちゃな中、はっきりしているのは「帰りたい」という感情だけです。

でもやっぱり「何処に」帰りたいのか分からない…「凍土」に？それとも飼い主さんのお家？それとも……。

「ああもうッー！」

ぐしゃぐしゃもやもやとした思いを吐きだそうと、私は無意識に身体を寄せている木を殴りつけ　…そう、初めて物に当たってしまいました。

飼い主さんは物を大事にする人だから、当たってはいけないと教わっていて……教わって、いたのに。……破ってしまった。

殴られた個所は陥没していて、私の手は余計に血が出て。とても痛かったけど、これは飼い主さんの言いつけを破った罰だと思うのです。

（…水で洗わないと、危ないって飼い主さんが……でも、動きたくない……）

またも面倒な思考に入りそうになって、私は　それ以上考えるのをやめて、直感で動きました。

とにもかくにも、今は寝てしまおうって。

（もう少し寝心地が良い所を、探しましょう）

*

「お嬢さん、お嬢さん」

「……ん、う……？」

「お嬢さん、何故こんな所で眠っているんだい？」

「……………」

気持ち悪い。

目の前のお爺さんの質問に応えたいのに、気持ち悪くて口が開かないです。

「しゃべれないのかな？」

「……………」

その質問にふるふると頭を横に振って、何度か躊躇ってから、声を

出そうと……出そうと……？

「……う……え？」

「お嬢さん？」

「……あ……っ……い」

声が、出ない。

出そうとすると息に混じった音になり、出しきった後は喉が痛くて私はその現実にはろぼろと涙が零れてしまつて。

お爺さんが困っている雰囲気分かるのに、謝る事も出来ないのです。

「……お嬢さん、何日前に此処に来られたのかな？ほれ、この棒で書いてくれぬか？」

「……」

「……そうか……」

あのな、お嬢さん」

「もう、一週間も経っているんだよ」と、静かな声が教えてくれたのです。

もつと言えは、私が寢床だと思っていた所はドボ……ど、どぼるべく……とかいうモンスターの尻尾だったようで、のんびり歩くモンスターとその尻尾で死んだように眠っていた私を見つけたお爺さんは、

尻尾から落ちてしまった私を見て、慌てて飛んで来てくれたのだとか。

それだけでも絶句モノなのに、お爺さんは思わず気を失ってしまう程の事実を、教えてくれたのです。

「それで、お嬢ちゃんが今いる此処は、『密林』なんだ」

みつりん、って、どこですか？

*

雪が所々残る、少し懐かしさを感じる村、ポツケ村の端の端で、私はお爺さんの手伝いをしながら過ごすことになりました。

防具から温かくてもふもふして可愛い服に変えて、お薬を作ったりお店の番をする事が私のお仕事です。

あれからもう、一月は経ったのでしょうか……。

（もう嫌だ……飼い主さんの所に帰りたい……）

あそこには雪なんて無かった。こんなに寒くも無かった。知らない人と一対一で接したことすら無かった。少しだけ閉塞感のあるこんな村なんて大っ嫌い。もう嫌、帰りたい……。

（せっかく住まわせてもらってるのに……悪い子になっちゃいましたね、私……）

でも、でもしょうがないじゃないですか。お爺さんは優しいけれど、お婆さんがとても怖くて。お嬢さんには事あるごとに「大っ嫌い」と（初めて面と向かって言われました）言われ続け。

店の売り上げが良くなったから此処に置かせてもらえるけれど、何の足しにもならなかったら何処かに捨てられる環境の中で、私は何度も、子供のように笑っていられた昔の日々を想うのです。

飼い主さんの言う「馬鹿」とお嬢さんの言う「馬鹿」の寒暖差とか、私に色々持つて来てくれる人達の声の優しさと、ほんの時々にか聞けない、飼い主さんの優しい声の違いとか。……色んなものの違いを感じる度に、飼い主さんに抱きつきたくてたまらない衝動に駆られるのです。

だけど恋しいと思う姿を見せると誰かに咎められてしまうから

私はいつしか本当に、声が出なくなってしまうって。

住み慣れた凍土よりも寒い世界で、あの時の行動を恨むくらいしか出来ない。

（……あ、お客さんだ）

「、？」

ただでさえ嫌いなこの世界で、私がどうしても好きになろうと思えない理由の一つにあがるのですが　私はこの村の言葉が分からないのです。

名前程度しか分からないし、言葉を教わろうにも「生意氣」とか「そんな暇があったら働け」とお婆さんとお嬢さんに言われ、お爺さんは仕入れの仕事が忙しくて教えてくれません…。

仕事に差し障りがあるので、商品の名前は教えてもらったのですけど……まあ基本的にお嬢さんがお客さんの相手を買って出してくれるので、私は黙ってお店の（何故か奥ではなくて人から見える所で）商品に囲まれながら、黙々と薬草を磨り潰し続けます。

ですがお客さんはまず最初に私に声をかけます。そして私は言われた通り、意味が分からないながらに微笑むのです。

この前、私に優しくしてくれる（扱ってる商品故か言葉が大体分かる）離れの店の女店主さんが「こんな何も分かっていない娘に厭らしい商売をさせて！」とお婆さんの胸倉を掴んでは怒鳴っていたので、あまりよろしくない事なのだと思います。

(…厭らしいって最近よくお嬢さんに言われますけど、どういう意味なのか分からないのです…)

こてん、と首を傾げていたら、お客さんはお嬢さんとの会話を急に打ち切って、ニコニコとお薬を注文してきました。

額いてお薬を取りに行こうとしたらお嬢さんに小突かれて転びそうになったけれど、何事も無かったかのような笑顔で、お薬を渡します。

素早く、相手の手が触れない内に薬を渡すと、隣でお嬢さんがお金を受け取りました。

そしてまた見えないように小突かれたので、私はそそくさと持ち場に戻るのです。

「、」

こっちおいでと手を招かれますが、私は変わらず微笑んでぺこりと頭を下げました。

相手はそれでも何かを言ってきましたが、お嬢さんに迫られて渋々何処かに去っていきます。

(……飼い主さんは、こんな私を見たら、どう思われるのでしょうか…)

別に嬉しくも無いのに笑って、小突かれても平気そうな顔で笑って、何も言わず、心の中で泣きごとを言い続けて。

軽蔑されるでしょうか。可哀想だと思ってくれるのでしょうか。自業自得と、見向きもされないのでしょうか……。

（私の中には飼い主さんしかないのに。飼い主さんの中に、私は……）

思わず俯いていたら、伸びた髪が煩わしくて。暗い気持ちのまま、髪を一房、ぼんやりと弄ってみました。

元々狩りに行く前から伸び始めていたのですが、この一月で肩を少し越す程度に伸びた黒髪を、私は切る事が出来ずにいました。

だっていつも、この髪を切ってくれていたのは飼い主さんなのです。恐る恐る切ってくれていたあの手じゃなきゃ、嫌なのです。

（もっ…あの髪飾り、付けることも出来ないのかな…）

そう思うと苦しくて苦しくて、お嬢さんにまた小突かれるまで、私は静かに泣いたのです。

*

こんな想いをするなら、あの時あの場で泣いてしまえば良かったんだ。
…と後悔中の兎ちゃん

9・新しい環境にはなかなか慣れません（後書き）

ポツケ村の住人を「冷たい人達」みたいにしてみました。
ん。

ユクモ村は何となく他所の人間に優しくそうなイメージがあるのですが（見た目が華やか？なせいかもしれませんね）ポツケ村は店も少ないし雪が残っていて人寂しいせいか、とても閉塞的な村に見えたので……。

勿論、そんな閉塞感漂う中でも咲ちゃんの代わりに夜の扱いに怒ってくれた女店主もいるし、他所者に優しい人だっています。笑ってるけど笑ってない夜ちゃんを、下心無しで励まそうと思った男性客もいたかもしれません。

それでもやっぱり、夜ちゃんにとってはどうでもよくて、冷たい村なのには変わらないのです。

10・弱りやすいので、「ご注意ください」

「……黒。男の膝枕なんて嬉しくないだろ」
「いいえー？」

「まったく……まだ家計簿終わらないから、先寝てていいんだぞ」
「眠くないですもん」

「……さつき寝てただろ」

「だって飼い主さんの膝枕、落ち着くのです……」

「落ち着くな」

「うー……」

「はぁ……」

「ふふっ飼い主さん、くすぐったいですー」

「……」

「んーん」

「……家計簿が終わらない……」

「え？」

「いや」

「……？」

「……ホットミルク飲むか？」

「蜂蜜！蜂蜜！」

「腐るほどあるが、今は駄目だ」

「……」

「……肉汁入れるぞ」

「……私、飲みません……」

「ん」

「……やっぱり俺の膝を枕にするのか」

「えへへー」

「まったく……」

「……」

「……」

「………私も飲みます」

「ああ、じゃあ退け。今淹れ」

「飼い主さんの、いただき 熱い……（・・・）」

「……飲みたかったら冷ましてろ。ブランケットずれてるぞ」

「はふっふー……」

「………」

「はふはふ」

「………」

「はふふふ」

「……お前はどれだけ猫舌なんだ。温くしといたんだぞ」

「え？」

「……あっ」

「温くしといたって……飼い主さん……」

「……っ」

「今日は猫舌なんですか？」

「………ああ、そうだな」

「飼い主さん、そんな乱暴に書くと破れてしまいますよー……はふー」

「………」

「そろそろいいですかね……」

「………美味いか？」

「……ん……あれ、甘い？」

「………」

「これ、蜂蜜入ってるのですか？……飼い主さんだけですー！」

「……はぁぁぁぁぁ……」

「？」

「……もういい。……あんまり飲み過ぎんなよ」

「さっさとしなさいよ！この棒つきれが！」

ドン、と。……暖炉の灰を掻き出していたら、背中を強く蹴られました。

その衝撃で手が少し火傷してしまいましたが、私は何も言わずに頭を下げました。……だって、最近のお嬢さんはとても暴力的なのです…。

唯一の味方であるお爺さんはやっぱりお仕事でいなくて、お婆さんはのんびりとお茶を飲むだけで、此方を見もしませんでした。

（最近…打撲の跡が消えないのですが……）

まあ、ゆったりした服からは見えないしいいかな、とは思っていますけどね。

*

今日は快晴。だけどとても冷たい日。

何かしないと手が冷えて痛いのですが、今日はお薬を作らずに黙ってお店の番をしなくてはいけません。

ひび割れが出来た手に息を吐きかけながら、それでも心は温かったです。

忙しいお爺さんが、他所者の私の為にお金を払ってギルドを含め各所に私の情報を出してくれると、ユクモ村に行けないお爺さんの代わりに、強いハンターさんにクエストとして頼むとも言ってくれたのです。

最初に連れて来られた頃にギルドに連絡を入れてくれたらしいのですが、モンスターの被害が多くて後回しにされていたようで、最近やっとその被害が落ち着いたらしいので、本格的に頼む、との事です。

(…もうどんな風に思われてもいい。飼い主さんにもう一度会いたいです……)

この村に居たくないとかよりも強く、飼い主さんにただ会いたい。

一緒に住みたくなというのなら住みません。視界に入れたくないというのなら目の前から消えましょう。……だけど、たった一度でいいから飼い主さんに会って、お礼を言いたい。

この村に来て、やっと分かったのです。私は本当に恵まれた生活を送っていて、飼い主さんに守られていたのだと。飼い主さんはぶっきらぼうで時々怖いけど、本当に本当に優しく、私を大事にしてくれてたのだと。

（何とかして、飼い主さんに『ありがとう』って、お礼が言いたいです……）

そしてもし許してくれるなら、不自由な私の気持ちを聞いて欲しい。

食事も、会話も、何もかも。飼い主さんがいないと味気なくて、寂しくて、悲しい。

いつもいつも飼い主さんの事ばかり想って、飼い主さんが名前を呼んでくれるだけで幸せで。飼い主さんに触れられないだけで、死んでしまいそうなのだと。

飼い主さんを想うと幸せで、辛くて苦しい。この感情を何て言えばいいのか分からないけれど。たった一つだけ、分かっているのです。

（飼い主さんの隣に、居させてください）

束の間でも、良いですから。

「
その美少女さあん！こっち向いてー！」
「？」

思わずポロリと涙が零れそうになって、手を祈りの形に組もうとした矢先の事でした。

大変元気な男性が、がっしやがっしやと鎧を軋ませながら私の所へと手を大きく振りながら駆けてくるのです。

（あれ、この前来てくれた人、ハンターさんだったんだ…）

お店のお客様が見える所で黙々と薬草を磨り潰していた私に、お薬を買いに来てくれた人。何度か来てはこっちにおいでと手を招いていて。

（……？何で言葉が分かるのでしょうか…？）

今まで此処の地方の言葉で話しておられたのに…。

「いやー良かった！今日はお嬢さんいないんだね！いつも此処に来ると邪魔してくるからさあ…」

内心怯えている私に気付かず、男の人は語尾を潜めて「まったく迷惑さ」と言い捨てました。

その声がとても冷えていたので、私はびくりと震えて
それに
気付いた男の人は二力つと笑って自己紹介してくれました。

「俺、ユクモ村生まれのハンターで、豊受^{トヨウケ}って言うんだ。食い物の神様からとってるんだぞー？」

「……」

「手頃で高額のカエストがこの村に結構あったからさ、狩って狩って狩りまくってたのよ。そしたら村の知り合いがさ、めっさ美人な女の子が居るって言うから…可愛過ぎて通っちゃった。婚約者には内緒にしてね！」

俺は婚約者一筋、女の子は好きだけど手は出さない紳士だからね！安心してくれたまえ、…と高らかに告げるのを、私はただ黙って聞いていました。いえ、黙る事しか出来なかったのです。

（　　ユクモ村出身……！　　）

じゃあ、もしかしたら。

「　　最初はね、ただ単に口のきけない子としか知らなかったから、ここいらの人間だと思ってずっとこっちの言葉で話しかけてたのよー」

「……」

「んでんで、この前、『咲』っていうハンターから君みたいな子を知らないかって手紙が来てね？ギルドにも届けを出してるみたいなんだけど、埒が明かなかったから知り合い全員に送ったみたいなのよ」

「……！」

「読んだらばつちし君じゃん？でも人違いかなーと思ってしつこく君に言い寄ってみたんだけど、お嬢さんが異様に邪魔してきたもん

だからさ、ビンゴかなあと……こうして隙を狙って会いに来たわけ」

「……っ」

「え、ちょ、泣かないでっ。俺、女の子に泣かれると……」

「……」

「ご、ごめんね えーっと、『夜』ちゃん？」

久し振りに聞いた私の名前に、涙を拭きながら大きく一回、頷きます。

すると豊受さんは「っしやあー！」と力強く手を握り締めると、ぽんぽんと軽く肩を叩きました。

「……咲、ずっと君を探してたんだよ。見つけれないあまりにかなり荒れたらしくてさ、狩り場で無双し過ぎたせいでしばらく謹慎されたぐらい毎日君のことを心配してたんだ。いやー、見つかった良かった良かった！」

「……っ……」

（心配してた じゃ、じゃあ、私の事、嫌ってない……？）

豊受さんは私を泣かせるのが得意なのでしうか？

「探してた」「見つかった良かった」の言葉がナイフのようずっと耐えてきた心に突き刺さって、涙が勢いよく溢れだして止まらなくてしょうがないのです……。

（飼い主、さん……！）

私、私の事、忘れないでいてくれたのですね。心配していてくれたのですね　　！

「……さあ、もう泣き止んで。今すぐこの店を出るんだ。ギルドに保護の依頼をしないと。あと咲にも連絡しないとね」

「……？」

「……この家の人間は、君を逃がさない気だ」

念の為に^{ギルド}法で守られた場所に居た方が良く、と急に真剣な目で言う豊受さんに、私は訳が分からなくて。

きょんとした私に苦笑すると、豊受さんは低い声で、先程の冷たささえ孕んだ声で、教えてくれました。

「君は金になるからね」

「……」

「小突かれようが…手がこんなになっても、君には何処にも行く術がない。大人しくて『良い子』な君は、住まわせてもらっているという負い目から頑張っ^て働くだろう」

「……」

「もっと言えば　君は言うなれば招き猫さ。何人か俺みたいな馬鹿な男を日がな通わせるぐらいは簡単だろうし」

「……」

「だからこの店の人間……あの人の良さそうな爺さんはね、君が行方不明の人間だなんてギルドにも村の人間にも伝えていない。近くの村の口のきけない親戚を預かったんだ、って周囲に言ってるんだ。

それにさっき確認したら、君を探す依頼を金で消そうとしてたよ」
「…え…」

待つて、ください。

私は自分がどういう風に扱われていたのかは分かっていましたが、あの、私の味方だと思っていたお爺さんが？

お嬢さんやお婆さんから庇ってくれて、お爺さんがいる時は虐められなかったのに…？

「…今までずっと、君が陰で虐められてるのを見て連れ出してやりたかったんだけど　君の証言とその怪我が無いと、こつちも動けないからさ。でも君が『行方不明のハンター』なら、それを知った俺には君を保護する義務があるから、少しの無理も大丈夫」

だから、ここから出てくれ。真剣な目で、飼い主さんと似た大きな手が差し出されて　私は、豊受さんのその姿に、飼い主さんを重ねました。

お爺さんがそんな事をする筈が無い、と豊受さんを危険視する声に、「飼い主さんの事を知っていた」「ギルドに行くのだから、それで真実が分かる筈」と説き伏せて、そつとその手を取りました。

……結局私は、飼い主さんを連想させるモノに弱く、信じてしまうのです。

「了承、って事でいいのかな？」

「……」

「じゃあ、…あ、何か持って行きたい物とかある？」

「……」

「そっか。じゃあ行こう」

二力つと笑う豊受さんに、私も釣られて弱弱しく微笑んで。

冷たい風を防ごうと服の合わせを掴んだ時でした ちょうど
ガラリと奥の扉が開いて、荷物を持ったお婆さんが出てきたのは。

「……何を、しとん……!？」

「……っ……!」

ギツと、視線だけで射殺せそうな程に強く睨みつけるお婆さんに、
私はビクリと身が竦んでしまいました。

パニックが起きそうになって視界がふらふらとして、とにかくどう
しようも何の反応も返せない私を庇うように、豊受さんはお婆さん
の前に立ってくれました。

「後で通知しようと思ったんですが、丁度いい。彼女 夜を、
連れ帰させていただきます」

「ああ、ん!？」

「知っているでしょうが、彼女はギルドから搜索依頼が出されてい
る行方不明中のハンターで」

「そげなこと知るかい!! さっさとその棒をこっちに返し!! ま
だ仕事が残っとうがッ」

「……自分も同職の身として、彼女を保護する義務がありm」

「どうせ嘘言って売りつける気なんだろうッ 犯罪者が!! その小汚い

顔を二度と見せるな！」

「……………」

ばしゃあつと近くの水が入った桶を豊受さんにぶっかけ、お婆さんは商品を乱暴に落として私に手を伸ばします。

コロコロと此方に転がる桶を蹴飛ばして、鬼のような形相で迫るお婆さんに私が息を飲んで身体を固くすると、驚掴みにしようと伸ばした手は届く事はなく　黙って水を受けた豊受さんがその手を掴んで止めました。

「放しいー!!」

「……………」

「ハンターが村人にこげなことで許されると思うんか!？」

「……………」

今だけ、この人よりも良い耳が嫌になります　お婆さんの声により怖くて、うるさくて、耳から脳を刺すかのように突いて聞こえるのですから。

（…………豊受さん…このままじゃ、風邪を引いてしまいます…）

私の目の前でばたと水滴を落とす豊受さん。はらはらと見守っている、豊受さんは唾を飛ばしながら吠えるお婆さんの腕をぐつと曲げて、静かに口を開きました。

「…………婆、よくまあこのクソ寒いってーのに水かけてくれたな」

「あゝ あ!？」

「ぶん殴りてーが… テメーの言う通りこちら村人に危害を加えると面倒だからな」

すつと腕を放して、鼻を荒く鳴らすお婆さんに冷たく一瞥すると、
豊受さんはさつさと私の目の前から去ってしまいます。

(え !?)

目の前で邪魔をしてくれた豊受さんが消えて、私はようやくお婆さんに強く掴まれて。

血走った眼が私に近づき、私が暴力よりも嫌いな、聴覚を痛めつける為に耳元で喚こうと口を開き 私が涙目をきつく閉じ、痛みに耐えるようにと身構えた瞬間、ゴツと嫌な音が。

「……………」

恐る恐る目を開けたら涙が一筋零れて、何度か瞬いて見たのは、

(…………… あれ?)

「 豚みてえな顔だからな、特に気にもなんねーだろ」

もう一度、お婆さんの顔に直下して、ころころと転がる桶。倒れて呻く、顔が赤いお婆さん。

蹴り飛ばした足をトントンと軽く叩いて、豊受さんは少しスッキリ

したお顔で言いました。

「突然の突風、……はキツイか。食中毒って事にして…顔は転んだ時の怪我ってことにするか…」

「？」

ぶつぶつと呟いた後、チエダーさんのようにニヤニヤと笑いながら、豊受さんはポーチから桃色の美味しそうな水が入った瓶を一つと、透明な水の入った瓶を出しました。

「……、…」

「ん？大丈夫大丈夫。死なないから」

「…」

そっという問題なのですか…？

豊受さんがお婆さんの口に零れないように透明な水を飲ませると、急にお婆さんは小さく唸って、私はオロオロとしてて。

豊受さんは一時間後が地獄だぜ、と低く笑うので、とんとんと肩を叩いて首を傾げました。

「この薬はな、強制的に吐かせるんだ。しかも使ってもバレにくい便利な薬だねー。結構長いことこれが続くから、俺らの事を気にしてらんねーよ」

そう言ってお店の中に入り、捨てようとしてそのままにされていた腐りかけの林檎を齧って暖炉に吐き捨て、もう一度外に出てお婆さ

んを俵のように抱いて適当に捨てました。（その際に椅子などもぐちゃぐちゃにしていました）

お婆さんの近くに林檎を転がして、豊受さんはジャムが並ぶ棚の一番目がいく所に桃色の美味しそうな水が入った瓶を紛れさせ、周囲のジャムには別の透明な水の入った瓶の恐ろしい中身を少しずつ入れます。

「うつし、とりあえずこれで仕返し第一段階終了、つと」

「……」

「ん？大丈夫、どっちも死ぬようなものじゃないから」

「……」

「夜ちゃんの給料を取るにも流石に窃盗扱いになるしな……」

「……」

「どうしよっかな……」

「……、……」

「……ん？……え、ちょ、何で泣いてるの！？」

（……私、これで自由になったんだ）

そう思うと、さっきから涙腺の緩いこの目からは、ぼたぼたと涙が落ちてしまうのです。

（……もう、怖くないんだ）

今までずっと、平気そうに沈黙を保っていたけれど、本当は死んでしまいそうだった。

暴力をふるうお嬢さんも怖いけど、それよりも本能的に身が竦んでしまう程の咆哮のような怒声を吐くお婆さんが一番怖くて。この人

の怒鳴り声でしゃべれなくなつたと言つてもいいくらい、この人を恐れてきたから、……今、凄く安心してしまふのです。

豊受さんはそんな私の心情に気付いてくれたのか、黙つて私の身体を抱き寄せて、頭を優しく撫でてくれました。

「これでもう、咲の所に帰れるから」

*

兔ちゃん虐めはこれにて終了です。（多分）

10・弱りやすいので、ご注意ください（後書き）

オマケ（キャラクター紹介）

トヨウケ
＊豊受

第三話に登場して婚約者にホモの噂を流されたハンターさんです。捨て子で食べ物に困っていた養父が食べ物の神様の所に祈りに行った先で拾われ、食うに困らない人生でありますように、という祈りを込めて、この名前を付けられました。

貧乏なのに拾ってちゃんと育ててくれた養父の恩返しのために、現在ハンターとして高額クエストを受けては養父に仕送りをしてる毎日です。

ちなみに咲ちゃんとは幼馴染なので第三話ではすっごく情けない素を出しています。

昔は殴り合いの喧嘩をしたりモンスターの巣に爆竹放り投げたりそれがバレて村長に仲良くボコ殴りにされたりと、生傷の絶えない日々を一緒に過ごしました。

もう出さないと思っていたキャラなので、口調がおかしいのは許して下さい。一応女の子の前と男の子の前では性格が違うという設定……を後付けしました、すいません。

ちなみに咲ちゃんの手紙の内容ですが、今回の事情（喧嘩は伏せてます）と夜ちゃんの容姿、報酬金額（高いです）、「分かてるだろうけど、夜には絶対何があっても手を出さない、もし誰かに傷つけられたようなら、俺が付くまで、『よろしく』な？」という内容が書かれていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129z/>

雪の中からこんにちは、飼主さん！

2012年1月10日18時53分発行